

3 3 4

	No. S 57
東京都立松原高等学校図書蔵	

保存用
永久保存





— 目 次 —

寄稿	沢永S T	野次郎	(1)
千々に思いを馳す	野次郎	義生	(2)
新高爺哲へ	Mamechan	生	(6)
創作	谷中	康彦	(7)
少女の行動	原西	光	(13)
人類の生長	鈴木	正良	(12)
随想	高松岡	征子	(14)
真冬来のへき1955年を忘るな	本藤山橋良中田橋	幸百合史	(15)
ユモアを忘れ	高橋	幸多	(19)
狂つて漫早紅	高橋	幸生	(20)
くんのあの日	高橋	幸進	(21)
春の炎	高橋	光喜	(24)
山い悪糸論	中大小石太	子司	(25)
のにおの口	西津林原田	茂美	(16)
雲意た池	光	子司	(17)
想	友耕	惠之	(18)
ら抱ふと負死(仮題)	川河塚原村野	耕男	(27)
か私母出発に際して	西木田村	秋子	(28)
父友H占果街弟私	純明琢光ユ	千秋子	(29)
マ住所録(教員・生徒)	米谷	洋子	(30)
表紙	開司朗	二子	(31)
		磨	(32)
		章	(33)
		リ	(34)
		リ	(35)
		リ	(36)
		リ	(37)
		リ	(38)
		リ	(39)

千々に思いを馳す

校長 沢野次郎



「くるくる」は文芸雑誌でありますから、何時ものような巻頭の言葉は止めて随筆的に思ひ出すままに書き綴りたいと思ひます。先ずペンを取る時期が高等学校入学願書受付けの時、毎日が応募者で教を重ねて行きますが、完全に本校の信用がかかる点に於ても明確に示されておりますことを第一に書き、これから奥へと進んで行きたいと思ひます。次に感ずることは冬の寒さ、誰も同じ経験であります、取り立てて云えば一番思ひ出が多く且つ苦しかったことは冬の苦学時代であります。これは筆に表わせない多くのことがありますが今は紙面の都合ということと昔の語り草として譲ることに致しましょう。やはり現実の今が一番はつきり致しますし又びんと身にしみて参ります。私の希望は当然今年果立って行く卒業生に思ひを馳せて行きたくなります。再び来ない卒業の高等学校時代も夢の一連になつて行くのではないかと心配になります。青春時代はこの時期に一番意義あらしめたいものです。しかし夢は失いたくないものです。いわゆる青年にはなりた

くないものです。単なる世の喜ぶ青年は決して見上げたものではありません。厳とした一面愛情のある又目的に向つて突貫する意志の人、いわゆる精気に燃える青年らしい春の訪れを思わせるような躍動の脉々とふくれ上つて来る気持、これは私の是非望む諸君への期待であります。又自分の過去に於ける青年時代の抱いておいた信念でもありました。

今は人生の半ば以上を過ぎて昔の青年時代をなつかしく思ひます。これからでも遅くない積りで大いにその意欲で頑張りましょう。いや青年の真の姿に帰る努力がこれからでも或はある程度繰返すことが短かいながら出来るかも知れません。これがせめてもの社会に対する私の報恩かと思ひます。或は同感者もあるかと想像して心秘かにほほ笑む訳であります。しかしこれは私の勝手な考えでありましょうか、決してそうでないことを確信して又勝手に悦ぶ訳であり又考え方によつてはこれが人生の反復かとも思われます。つまりこの反復が長ければ長い程青年の時期が多くなつた訳であります。又それが青年の私達への希望かも知れません。従つて私の青年教育に対する努力も決して無駄でないばかりでなく、生徒に対する私の務めかとも思ひます。本校の将来が発展と共に元気に満ちた繰返しに歴史の上に歴史をつくり、又綴られることを諸君と共に念願致します。

最早冬も終ることでしょう。一日の仕事も終りに近くなつた。再び明朝の日出するまで十分な眠りの中に明日への希望を持つて日々を送つて行きたいものです。万物は冬から春へとテンポを早めております。日本の進歩もかくあるように自分もその中に入つて許された生活を天により万象の片輪を少しでも与えられれば満足に思ひます。折角の随筆が鈍つて参りましたことを御容赦下さい。(二月十二日記す)

新高登山記(一)

教諭 永濱先義

序

新高山に登りたいとは渡台以来常に抱いていた希望であった。

第一、日本の最高峰富士山を凌ぐこと百八十米海拔(三九五〇米)であるというだけでも私の心を惹いた。新高山に登ったことのある先輩が誇らしげに登山談をしてくれるのを聞いてたまらなく心が躍った。

第二、熱帯から温帯、冷帯を経て頂上は寒帯の気候である。従って各帯の植物景観を数日にして見ることが出来る。植物に対して余り知識を持たない私ではあるが、数日の間に各帯の植物を見ることが出来ることは愉快なことである。このことは換言すれば低地は夏、中腹は春、頂上は冬ということである。この点我が国では経験することの出来ないことで私の心を魅するに充分であった。

第三、大自然の懷の中に飛び込んで行って天地の悠久に参じ浩然の氣を養うことも目的の一つである。あのすがすがしい甘い大森林の空氣を呼吸するだけでも心の底まで爽やかになるではないか。

しかしこれは一人では実現出来ない。丁度台中州教育課の主催で新高登山が計画されたので早速参加することにした。(昭和十八年夏休みのことである。)

新高山は台中、高雄、台南の三州境にあり海拔三九五〇米、新高山麓(註)山脈から分離して孤立した山が不規則に集ったものの首座を認め我國に比なき雪山である。東は八通関鞍部を隔て中央山脈と相對し西はタタカ鞍部を以て阿里山山麓に連接する。この一帯を含む地域は、嘗て我が国の領台當時は新高阿里山國立公園に指定されていた。

ケ班に、女子十二名を一ケ班にし合せて三ケ班に編成された。(僕は第一班に入る。有馬団長(州体育主事)の挨拶、登山上の注意があつて、貸切りバス二台に分乗集々を出発したのは十一時、気温二十八度であった。バスは濁水溪に沿って走った。濁水溪の水は名の示す如く黒く濁った水であった。広い川の中洲には草が茫々と生えていた。ここは芋畑に利用されている。誰かが「この川原で兎狩をしますよ。」と云った。中洲で兎狩が出来る程広い川を想像して下さい。「こんな濁水にでも魚がいるでしょう。か?と太公望のY君が誰れに云うともなく云った。やはり鰻や鱈がいますが、この川の魚には眼がないそうです。あつても役に立ちませんからね。」と誰れかが答えた。眼があつても役に立たぬ程濁っているのである。真偽の程は保証できぬが面白かった。やがてバスは徐行しながら鉄線橋の上を走る。これは龍神橋といつてこの橋より奥が善地になっている。橋を渡ると「龍神洞」と刻まれた隧道の中に入る。濁水溪本流と分れて支流たる陳有蘭溪に沿って溯るのである。郡坑という部落では大分人が行き来していた。芭蕉検査所もバスの車窓に映った。バスは何もない、ただ草の生い茂った所に止まった。午後零時半であった。「ここから少し行くと内茅埔という部落があります。」と教えてバスは不愛想に方向を変えてしまった。仕方なしに歩き出した。三十分も行くといふ茅埔という部落に着いた。「善童教育所」(高砂族の児童に日本語を教える所、教師は警察官)に行つて昼食をすることにした。色の黒いたくましい体、異様に光る眼の玉が僕らを見ると、「今日は」と云つて頭をひょこんと下げるのが可愛らしい。勿論皆裸である。女の児は汚れたワンピースのような物を着ている。手洗場に行つて手を洗おうとしたら水がない。仕方なしにあちこち歩き廻っていると女の児(善童)が水を汲んで来てくれた。中々気がきいている。

清國人はこれを天山と稱し、歐米人はマウントモリソンと呼び、高砂族(註)台灣蕃人の總稱)はサベツハ、又はウサベツク(ブアン族)と言ひ、或はバットンカン又はバトゥンコア(ツォウ族)と言つた。明治天皇によつて命令された新高山の名も、既に中華民國領となつた今日、当然変更されたであらうが未だ知らないの、我々に親しまれた新高山なる名称を使用することを許してもらいたい。

× × ×
第一日(七月十二日)

望望の新高登山第一日は来た。國民服に水筒と図嚢を十文字に肩に掛けリュックサックを背負いバンドを締めると身が引締つて来る。ヘルメット帽をかぶりビッケルを持って、家を出たのは午前八時頃であつた。

空はからりと晴れて目ざす新高主峰も南東六十軒を隔ててくつきりと見える。思はず足が軽くなり、口笛でも吹き出したくなる。バスに乗り込んで南投街を出発したのが八時半、気温は二十九度であつた。(僕は寒暖計を靴の中に入れて気温の変化を見ていこうと思つてゐる。)

青々として目を射るような樟の並木の間にバスは走る。甘蔗畑、稔れる稲田等が続く。丘陵は芭蕉畑、鳳梨畑に利用されている。自然をどこ迄も経済的に利用しようとする中國人の生活力の旺盛さが窺われる。

幾つか坂を登つて峠を下りかかると集々盆地が展開される。心持ちよい振動が体をゆする。盆地のはば中央にある集々街に着いたのは九時四十分頃であつた。ここが我々新高登山団員の集合場所なのである。雲が下りて来てここからは新高山は見えなかつた。十時過ぎ汽車は勢よくこの駅に着いた。台中市から乗り込んだ団員一行が降りて来た。駅前広場に於いて団員全部集合し班の編成をなした。男子二十六名を二

「有難う。」という、にこにこして「いえ」と答えた。帽子をとると汗ばんだ額に冷たい風が吹いて来た。昼食を済ませて二時に集合。予定ではこれから東埔下迄台車(高砂族の押すトロツコ)で行くことになつてしたが、一週間前、台車が断崖から転落して数名即死したという事故があつたので、警察から人間を乗せることは禁止されている。止むを得ない。リュックだけを台車に託し六里十二町を歩かねばならなかつた。第一班(男子)第三班(女子)第二班(男子)の順に一列にならんで出発した。道々高砂族に会うと必ず「今日は」と向うから挨拶する。入墨をした色の黒い女等も、「今日は」とやさしく声を掛ける。やがて体が汗ばんでくる。額からは汗がたばたと落ちる。粟畑の所々には白百合が咲いている。陸稻も所々に作られている。思いがけなくも鶯が佳い声で鳴く。内地の春を偲ばせる。釣橋にかかる。歩く度に左右上下に揺れる。ただ二列に渡された板だけを見て踏みしめながら、ゆらゆらと歩く。やうな渡り終つた時ははつとしたが、未だ道路がゆらゆら揺れているやうな気がする。二百米もあつたらうか。一歩誤ればもう命はないのである。二つめの釣橋は「筆名橋」といってやはり二百米位あつたかと思う。その橋を渡り終つた所で休憩した。近くの巨岩に「山道大海」と刻んだ碑があるそうだが、足にマメが出来たらしくて痛いので行かなかつた。まもなく出発。時々鶯が来ては鳴いてくれる。白百合が揺れる。汗が流れる。誰も今は黙々として歩く。谷川の音が聞える。ここまで来ると濁水溪の支流とはいへな過ぎた水である。こんな山奥には珍らしく、大きな製材所があつた。そこは製材所に働く者だけ三四十戸位の小さな部落をなしていた。ここでリュックを受け取つた。肩に重みが加わつた。雨の降りだしたのもここであつたと思う。予ねて用意の油紙をかぶつたがやはりぬれる。しかし絹糸のような細い雨

で涼しくて却って気持がよい。山々が煙って見える。全く墨絵のように美しい景色である。針葉樹の林を通り抜けると雨に濡れて美しい仏桑華の生垣の間に紫色の花が開いている。生垣の内は学校のようなである。門標を見ると、「私立和社国語講習所」と書いてあった。そこには小さな部落があった。未だ新しい木の香のする専売局収納所に行つて休ませてもらった。もう六時頃だったと思う。気温は十八度であった。さっきの針葉樹林は台湾杉で大学の演習林であるところの人が教えてくれた。一杯の熱いお茶がとてもおいしかった。又集合。出発。ここからは少々坂道になった。雨は降ったりやんだりした。芒や白百合が内地を偲ばせてくれた。今歩いている道は河岸段丘上にある。福建人の電信工が「この道は崖崩れがしているから山越をしなければ先へは行けない。」と教えてくれたので少し後戻りして急な山道を登らねばならなかった。息を切らして重い足を運んだ。或る時は蔓にかまつて上にはい上った。こうして山の頂上に達した時はほっとした。もうあたりは薄暗かった。これから下りた。下りかかった所で又高砂族の男四・五人の群に会った。彼らが「今日は」と挨拶したので我々も応答した。彼らとすれ違った時妙な臭がふーんと鼻をついた。それは肉が腐ったような臭であった。ふり返って見ると彼等の背にしている網袋の中から二本の鹿の角が出ていたので、狩猟からの帰りだと察せられた。腰には薙刀をさげていた。東埔下に着いたのは九時頃であった。もうあたりはぼんやりして来て人の顔も誰だか判別が困難であった。ここでばらばらになっていった団員を待ち合せた。一人足に擦傷を起した人があったので中々皆が揃わなかった。もう暗闇に包まれていた。木挽の家のランプが淋しく雨の夜に光っていた。山から切り落された材木に腰を下して足をさすりながら待った。やがて擦傷を起した人を

遙か山裾には高砂族の耕作している水田が薄緑色をしている。深く深く大気を吸い込むと山で鶯が鳴く。旅装を整え広場に集合。広場には台湾には珍らしく桜が沢山植えてあった。ここは海拔が十分高いので日本と余り気温が違わないので桜も美しい花を咲かせるであろう。(低地では日本の桜を移植して見ても内地で見るとような美しさは観賞出来ない。)警察官吏駐在所に挨拶をして午前九時東埔を出発。鷲と白百合とが交互に我々を慰めてくれるのは昨日と変わらない。やがて大きくカーブすると大断崖が眼前に突っ立っている。ここがこのコース最大の難所で、「親知らず」と書いた標札が立っている。絶壁の中腹に僅かに足を支えるに足る巾の岩道が縫っている。中途ではその小径すら絶えて手で岩につかまり、出っぱった岩の向うに足場を求めて渡らねばならぬ。一步踏み誤れば真逆様だ。下方百米の谷底へ行かねば止る気遣いはない。向う側の人にビッケルを渡し、足場を作ってもらう。通り過ぎてはっとして胸をなでおろす。蜘蛛滝や雲龍の滝は何れも二段になっていて。雲龍の滝は道路より上方二十五米の高さから清水が滔々と落ち、一旦淵をなして橋の下をくぐり、更に五十数米の下に流下してゐるのである。恰も龍が雲にでも昇るような勢で物凄い。「阿蘇山標高(一五九二米)」の標柱を過ぎたのが十一時頃、気温二十三度。ここからは鷲蹄が一杯植えてあり所々に木苺の朱い実もあった。又黒い岩には岩松が元気のよい緑を見せていた。花つり草(トレンヤ)の花も路傍に咲いていた。全てが温帯の植物になる。衆々駐在所に着いたのが十一時四十分、ここで昼食。ここにも吉野桜が沢山あった。家というのはこの山奥に駐在所だった一軒である。淋しいだろうと思つたが住んでいる人は案外平氣らしい。午後〇時十五分出発。「大山標高(一七二一三米)」「蔵王山標高(一八四一三米)」などを過ぎてはつぱり登っ

背負った一団がやって来た。皆が揃ったので又山を登り出した。ここから我々の今日泊るべき東埔荘までは地図では二軒足らずになっているのだがだいぶ遠い。闇の中を雨に濡れてはつぱり登っていく。やっと山荘の紅いランプの光りが見えたが、それが見えだしてからも中々そこには到達しなかった。やっとたどり着いた時には体を玄關に投げ出した程であった。どうしたことか、我々の一行が今日泊るといふことの連絡がついていなかった。その為宿では飯の用意もしていなかった。早速飯の用意を頼む。ランプを囲んで色々な話が出た。人々の顔が焔を受けて紅く見える。第一班からお湯(温泉)に入った。余り疲れていたのに向気が進まなかったが、奨められるままに湯に行った。湯はよい加減だった。足を思う存分伸ばして見た。かじかの声が浴槽に流れ込んで来る。湯から上って脚をなでながら話の仲間に入っていると、やと飯の用意が出来た。団長の挨拶が済んで「頂きます」というや否や、むさばるように飯を食った。今考えて見ると恥かしいような気がする。飯が済んだのは十二時近くであった。団長から明日の日程の話があつて床に就いた。今日は約七里の行程を歩いたのである。明日は四里十九町だから、たいしたことはないと思いつつ眠に落ちた。

第二日(七月十三日)

目覚ればここは東埔山荘である。鉱泉にて顔を洗い口をすすぐ。炭酸泉である。七時半、気温二十一度。下駄をつつかけて裏へ廻れば滝がある。阿蘇の垂玉温泉の風景に一寸似た眺めである。スケッチブックを開いて絵を描いている人もいると植物採集をしている人もいる。山荘の広場で団員一同朝礼。旭光を浴びて軽い体操をする、気がせいせいする。ここは山腹にあつて北東南は山に囲まれ、西側だけが開けている。

て行く。さっきの雲龍の滝の物凄いのに比べてこれは細々とやさしい滝がある。傍の立て札に「娘十六乙女の滝」と洒落た名が書いてある。滝は五段になって流れている。やがて鬱蒼たる林の中に入る。她々の木々には説明の立て札がある。「においたぶ(くす科)樹皮線香製造」等と。しかし一々記帳しておかなかったの大部分は忘れてしまった。こんな山奥を何人の日本人が通るであろうか? よくも行届いた説明書が立ててあるものと感心した。今はどうなったことであらう? 「対関駐在所」に着いた頃、下の方から雲が昇って来るのが気になった。ここから今日の宿泊予定地迄はもう一時間もかかるまいと思つて駐在所の人に尋ねてみたら、「二時間はかかるでしょう」ということだった。がっかりしたが元氣を出して出発する。無論列をなして出発するのではない。もう早い人はとくに見えない。遅れている人は遙か彼方を蟻のように歩いている。間もなく霧のような雨になった。油紙を出して被ったが道々で破れてしまつてもう役に立たなくなつた。鷲蹄の朱い花が雨に濡れているのもよい。「観高駐在所」には白いフランス菊が一杯咲き乱れていた。雨はどしゃ降りになる。少し寒くなつて来た。新高赤松にきりも(サルオガセ)などの寄生苔が長くたれさがっている所は、もう冷帯地方の眺めである。葉の細い笹の一面はえている丘を下りだすと我々の前途に蛇が邪魔している。体長四十厘米位である。雨傘という毒蛇だ。そうた、幸いどろどろと笹の中を姿を消してくれたので、大急ぎでそこを通過した。一寸摺鉢の底のように凹んだ所に「八通関駐在所」があつて、今日我々が泊るべき宿である。到着するやズ濡れの上衣、シャツ等皆脱いで先ず風呂に入る。午後五時半頃であつたらう。風呂から上って丹前をひっかけたのであるが未だ寒い。気温は十八度である。これが台湾の真夏だとはどう

しても思われない。地図を見ると今日の行程は四里十八町位だから大したことはない。五時間もあれば到着するだろうと思っていたが、あれで違っていた。八時間以上も掛かっている。

一里を一時間で計算するのは平地でのこと。山の一里は二時間と見なければならぬ、という法則を発見した。夕食を済ましてから炬に火を焚いてもらって濡れた衣服を乾かしつつ、今日一日の種々の出来事を話し合った。明日はいよいよ新高絶頂を極める日だ。床に就いたのは九時半頃であった。早く眠ろうとあせるのだが中々眠れない。隣りの部屋で遅く迄話声がしていた。寒いのでジャケツを着て毛布にくるまったが、雨に濡れたせいかクシヤミが出て仕様がなかった。

(以下次号)

親爺哲理

S 生

「うんと肥料をやったら」と熱心に肥料をしたからとて、稲は松の木のように大きくならず、豆が杉の木のように育ちもしない。ともすると却って肥料まけして普通より小さくさえる。その愛育する心情は誠に貴いものだが稲は稲、松は松、杉は杉なりの大きさを形に育つように生れているらしい。

台風で倒れた喬木はやがて朽ちて跡方も止めないようになるが、その根元に生えていたかわい植物が忽ち生い繁ってゆく。強きものは必ずしも強きが故に強きにあらず、弱きものが必ずしも弱いものとも限らない。

徒歩より自転車の方が速く、自転車より自動車の方が速い。徒歩の

ものが自転車と競争しても無理だし、自動車と競争しても無駄である。然し無形の競争ではその無理をするのを努力が足らぬと断定する。徒歩は徒歩なり、自転車は自転車なり、自動車は自動車なりの限度に於てのみ不可能も可能であろう。

文明の利器は極めて数多いが、その共通の欠点は、一寸の故障で全機能が停止してしまうことである。人間は自然のままで満足せず、手を加えてより精巧にしようとするが精巧なものである程こわれ易くいたみ易い。造化の神の手練は、自然そのまま完全であったに違いない。

Manechan

T 生

Manechan が Freesia の花をおいていった。

それは広い部屋の片隅に忘れられたようにおかれている。

その花は遠くにも眼につかない。

その花は遠くには匂って来ない。

しかし、さりげなくその花びらに顔をうめると、

そこからは、

高慢も虚榮もなく、

淋しきにも、孤独にも耐えながら

ふくらみゆく春の香りがしてくる。

Freesia

その小さな花びらは遠くには眼につかない。

その香りは遠くには匂ってこない。

私は今一度 Manechan のことを思い出した。

創作

知 瓊

三年 谷 原 康 彦

魏の国、済北郡に弦超という男が住んでいた。彼は平凡な一官吏で、従事係という局の属官であった。只それだけの平凡な男であったが、しかし彼は人一倍高い望みをいだいていた。というのは、彼はまだ二十才をこえたばかりの年令であったので、今よりもっと良い役目について、一戸をかまえることを長い間の念願としていたのである。そして美しい妻をめぐり、子供を沢山産んで老後を安楽に暮したいものだ、そんな年寄り臭いこと等も考えるのであった。しかし彼の安い収入ではその望みはとて叶えられそうにもなかった。それに年取った父母をかかえている身である以上、妻帯するなどはまったく淡い夢物語に過ぎないのである。そんな訳で、彼はいつもの甘い陶酔の後、に、現実の世のきびしさにはろ苦いあきらめを感じていた。しかし彼はその希望を捨てず、いつかは俺にも春がめぐってくるのだとばかりに毎日の生活をくり返していた。

或る時、彼は仕事のために河北省瀋陽県に出かけた。彼は道々馬にゆられながら一人もの思いにふけていた。「俺の俸給がいまより良くなったら、さっそく妻をもらうんだ。父母に親切で俺に優しい女をな。結婚してその内に子供が生れる。二人三人と……。俺が役所から帰って来る。すると妻が子供を抱いてやさしく出むかえる。俺は子供

を抱く、すると子供は俺の頬をびたびたとたたきださう。俺の胸は幸福で一杯になる。妻の笑顔、子供の笑顔、父母の笑顔、そして俺は腹の底から大声を上げて笑うんだ。そうだ、子供には何んて名がいいかな男の子なら楊というのはどうだろう。女の子なら玉英とつけよう」等ととりとめもない想像に胸をおどらせていた。

やがて彼の乗った馬は瀋陽県の大きな城門の前に着いた。街の囲りには高い城壁がめぐられ、その所々に物見台があり、そこからは武装した兵士達が見張をしていた。彼は手形を見せてそのまま城門の中へと入って行った。城門の中は、その日は娘々祭だったので美しく着飾った娘達がぎやかな雑談を交しながら娘々廟へと足を運ばせていた。その中に一人だけ特にきわだって美しい娘がいた。弦超はその美しい娘を遠くから眺め、心の中でああいう娘を妻に迎えたらどんなに幸福だろうと思つた。するとどうしたはずみか娘も弦超の方を見たので、二人の視線が一瞬音をたてた。しかしもう次の瞬間、娘の方から眼をそらし、側らの年頃の娘と笑いながら話して行ってしまった。弦超はそのまま、役所へ向い、まかせられた仕事を終えて宿へ引き退った。その夜弦超は不思議な夢を見た。彼は夢の中で、昼間娘々廟の前で出会った娘と話を交したのである。その娘の姿は昼にも増して、美しかった。彼女は昼間着ていた長袍は着ていず、その代りに透きとおった軽やかな衣をまとい、そのすそからは何んとも云えぬよい香りがたちのぼり、弦超は酔ったようにかの娘をうち眺めていた。その容姿は俗人の常ではなく、まるで天女のように神々しくこの世の女とは思われぬ程である。その上彼に對して云う声は銀鈴を振るような美しい音色であった。娘はにっこりと笑って、

「私は天上に住む仙女で、名を知瓊と申します。私は幼い頃に父母を

失い、これ迄は天帝の養女として暮らして参りましたが、季節の移り変りに花が咲き葉が紅葉し散って行く様を眺めるにつけても父母のことが思われ、淋しく泣いておりました。ところが、そんな私の有様を知らなくなった天帝が哀れと思ひ召して、地上の男を夫にせよと仰せられて私を下界にお降しになったのでございます。そして今日、娘々廟の前で貴方にお目にかかり、これこそ我が夫と心に決めたのでございます。私は貴方をおしたい申ししております。というとは娘はスィと消えてしまった。弦超ははっとしてその不思議な夢からさめ、床の上に起き上ってあたりを見まわした。しかしその美しい娘はどこにもいなかった。それでも彼はまだぼうとして床の上に坐っていた。それ程、夢ははつきりしていたのである。やがて我に返った弦超は今見た夢を反響して楽しんでた。美しい娘、銀鈴のような声……と。

(一)

それからというものの弦超は国に帰ってから夢の中の娘が忘れられず、恋しく思うようになった。そして朝な夕な夢うつつのうちにかの美しい娘の姿を追って、原野を越え進むのであった。何をしても手につかず、食慾はおとろえ、元来丈夫でない身体は瘦せ細り、眼は落ちくばみ、さながら幽霊の如く床にふせたままであった。そしてたえず娘の幻を追ひ求め、意味のないうわ言をつぶやき、それが驚くことにしたが、夢遊病者のように奇妙な様を呈し、一日中自分の部屋に閉じこもっていた。彼の両親は心配して、貧しい中からいろいろな医者に見せ、果は易をたてて占って見たりしたが、弦超の病はなおらなかった。そのため役所の仕事はおろそかになり、信用も失い家計はいよいよ苦しくなる一方であった。

ところが或る日彼の身の上に不思議な事が起った。それは彼が渡陽ることが出来たらと思わずにはいられませんでした。ああ、本当に貴女はお美しい」

そして向いしろ聞くところによると、彼女の年令は七十才だというのである。それを聞いて彼は驚き、かつ失望の色を顔に浮べた。その弦超の心を読み取ってか、娘は静かに云った。

「私の年が七十才とお聞きになってお驚きになったことと存じます。天界と下界とは時の觀念が違います。それに天界の者は不老不死です。ですから決して心配なさるには及びません」とそう答える娘はやはりどう見ても十五六にしか見えなかった。驚く弦超を尻目にその七十と答えた娘は下婢に命じて、車の中から青白色の美しい瑠璃で作った五つの壺をとり出させ、山海の珍味を用意させて持参の酒を出し、弦超と二人で盃を交し偕同老穴の契りを結び、それから多くの美人の下婢を侍らせて酒宴をはった。弦超はこれ迄にこんな美味しい料理や酒を口にすることがないと思つた。やがて二人だけの酒宴の席もたけなわとなった頃、その女は弦超に向つて云った。

「さて、私も貴方の妻として下界に降つて来た以上はいつ迄も貴方と一緒に暮らして行きたいと思ひます。こうして貴方とのかための盃を交したからには二人はもう夫婦でございます。たとえ今の貴方が賤しい身であっても私は末ながく妻としてお仕え致します。どうか私を愛して下さいませ」そしてその女は自分は天上のものであるから人目につくと大変である。それに夫婦となつても一つ家に住むことが出来ないだから毎日貴方の元へ通う為軽く丈夫で早く走れる車を肉づきの良い馬に引かせた馬車が一必要である。その他に食物は他国の珍味が必要であり、その上、着物はふんだんにあっていざという時に事欠かないようにしなくてはならないと云つた。それを聞いて弦超は困っ

果て夢に見た仙女のような娘が彼の目前に現れたのである。輜輶車という四輪車を二頭の馬に引かせ、多くの下婢をつれて彼の家の門前に立ったその娘は、美しい縫い模様のあるあや絹をまとい、その上にうすい絹の衣をはおっていた。弦超は自分の恋したっていた娘を実際に目の前に見て、あまりの驚きのため、しばらくは口もきけず阿呆のようにつつ立っていた。雪のように白い肌、紅玉のような美しい瞳、影の深い秀潤な鼻梁、こぼれるばかりに咲きほこつた椿の花片のような口唇、果ては桜貝のような耳朶に至る迄、完全の調和と澄麗な気品とが感ぜられた。やがて我に返った弦超はその娘を家に招じ入れ、親切にもてなした。といつても貧しい彼には自分の愛する女に何もしてやれないのが悲しかった。そしてせめて自分の真心だけでも判つてもらおうとおずおず話しかけた。娘はそんな私達を優しく眺め、ほほえみを持って彼の言葉を持った。

「私は弦超という貧しい官吏です。貴女のお姿には以前夢の中でお目にかかったことがございます。貴女のお名は知瓊様では……」

「ええ、私の名は知瓊。今日はいつかの夢のお約束通り貴方の妻となるために参りました。まさかお忘れではございませんでしょうね」と云つて彼の側に身をすりよせた。

「いいえ、決して忘れてはいません。もし貴女が仙女でいらっしゃるなら、私がどんなに貴女をおしたいにかお判り存じます。ああ私は幸福な男です。それにしても不思議です。貴女はまるで以前漢陽の娘々祭で会つた美しい娘さんにそっくりです」

「はは。そっくりです。実はあの時の娘は私だったのです。あの時の貴方のお眼には真実があふれていましたわ」

「それは恐縮です。あの時は本当に美しい貴女のような方を妻に迎え

た。何故なら今迄の彼の病によつてわずかの貯金は使い果し、それだなくさへあまり豊かな家庭なので、とてもそんな贅沢は出来なかつたからである。しかし彼は決心した。そして美しい妻のためにはあらゆる艱難辛苦も辞さない覚悟であつた。

「それに私は天界の者ですから貴方の子供を生むことが出来ません。このことはきつと貴方をお悲しませると存じます。しかしこればかりは私はどうすることも出来ないでございます。ですが私達天界の者は下界の人間のように嫉妬をすることがありません。ですから貴方が子供を欲しいと思ひ召したら他の人間の女と結婚しても私は貴方をお恨み申すようなことはございません。しかし、どうか私をお見捨てなく、いつ迄も愛して下さいませ」と云うと美しいその女は立ち上つて部屋を出て行つてしまった。

(二)

さて、美しい知瓊と夫婦になつた弦超は、それからまるで馬車馬のように働いた。弦超が妻をめぐつたといううわさはたちまちのうちに済北部一帯に知れ渡つた。しかしまだ誰も彼の妻の姿を見たという者はいなかった。

弦超が知瓊を妻に迎えてからというもの彼の家に不思議な出来事がたびたび重つて起つた。いつのまにか財布の中には金貨が入っていたり米櫃の中にはいつも一杯米があつたり、籠の中には美しい高価な着物がつまっていたりした。しかしそれ等の物は、使つても使つても、少しも減らず、いつも満ちあふれていた。そのため、だんだん彼も裕福になり、いままでの生活とは一変して豪奢な生活を送ることが出来るようになった。始めは仲良く暮らしていた弦超も、だんだん年月がたち生活になれてくると、子供のいないのをたまらなく淋しく思うのだっ

た。それも始めのうちは知瓊に遠慮して口には出さなかったが、二年と経つうちにぐちとなって彼の口について出るようになった。それは知瓊を悲しませ、人間と仙女の結婚の不可能さを感じさせた。それに彼女は弦超と一戸の家に住むことをしなかった。精神的な愛情だけが彼等の間をつないでいるだけに過ぎなかった。それから又一年の才月が流れた。今ではもう彼等の生活は彼等のものでなくなった。弦超にとって子供のいないことはたえがたい苦痛であった。それでも彼は知瓊を愛していた。

夫婦となつて七八年の年月が過ぎた。そして知瓊はやはり夜遅く彼の元へやって来て、翌朝早く帰って行つた。その去来はまるで飛鳥のようにすばやく、その姿は弦超にだけしか見えなかった。彼女が部屋にいても声だけ聞えて人の居る気配がするだけであつた。彼の両親はそういった知瓊を気味悪がって、前々から彼を説いていたが、彼にはどうしても知瓊と別れる気がしなかった。

或る時、彼は同僚達と酒を飲んでゐた。そして酔つた勢をかり、日頃の不満を同僚達にぶちまけてしまつた。知瓊という仙女と結婚したこと、一緒に暮せないこと、子供が生れないこと、そして夜来て朝帰り、その姿は自分だけにしか見えないこと等をこまごまと話した。たちまち弦超の妻は幽霊だ、声はしても姿は見えない、とうわさが飛んだ。

やがて彼等二人の話で済北郡中はもちきりであつた。

彼が酔つて秘密をもらしてから二三日して知瓊がやつて来た。その日はいつもの時刻に遅れ、その上浮かぬ顔をしてゐた。弦超はいつものように彼女を招き入れ、彼の側に坐らせた。知瓊は黙つて彼の手を取りはらはらと涙をこぼした。弦超は驚いてやさしく彼女に聞いた。

と、もう一度彼の顔を見てはらはらと涙をこぼし、静かに車中の人となつた。彼女が車に乗ると、二頭の馬はたちまち矢のように飛び去つてしまつた。

知瓊に去られた弦超は、日々を暗鬱として、安まらず、悲しみなげいた。そんな彼の有様を見た両親は、彼の悲しみの癒るやうにと、後添をもらうように彼にすすめた。しかし始めのうちは彼も知瓊のことが知れられず、妻を迎える気がしなかつた。それでもあまり両親がやかましくすすめるので、それに自分も子供が欲しいため、両親の話を聞き入れてしまつた。しかし知瓊の後に来た妻は弦超との間に男の子を一人残してはくつりと死んでしまつた。彼は重なる不幸にあせんとしたが、それでも子供の楊に望みをたくして勤めに精を出した。やがて知瓊が去つて五年の歳月が流れた。彼と二度目の妻との間に出来た楊も成長し、彼の後を追うようになった。彼も母親のいない楊が目の中に入れても痛くない程に可愛がった。その頃は彼の両親もこの世の人ではなく、まったく楊との二人きりになった。夜になりいつもの時刻になると彼は知瓊のことが思い出されるのであつた。しかし恋しい知瓊はあの日以来一度も彼の前に姿を現わしたことはなかつた。町中も一頃のように彼等二人のことをさまでさがなくなつた。只一つの伝説のように時々話されるだけであつた。

窓辺にたたずんだ弦超は青黒く澄んだ星空を眺め、大きく一つため息をつき、頭を左右に振ると、静かに窓を離れ、自分の寝台の上にごろりと横になった。天空の星は只無表情に彼を窓越しに眺めているだけであつた。

或る時、彼は役所の用事で洛陽にやつて来た。その時はもう彼も済

「知瓊。何が悲しくつてそんなに泣くのだ。私はお前をこの上なく愛しているのに」

それを聞くとき知瓊はたまらなくなつて、彼の膝に顔を埋め、肩をふるわせて泣いた。弦超は己の膝に伏している女の背をやさしくだいて「私の知瓊よ、お前の悲しみは私の悲しみだ。お前が泣くと私も泣きなくなる。さあ一体どうしたわけなのだ」と彼女の耳もとにささやいた。彼の言葉が終わると、やがて身を起した知瓊は、涙でうるんだ目でじつと彼をながめ、「私は貴方と夫婦であることを人に知られたくはなかつたのに貴方がおるかであつたばかりに他人に私のことをお話になりました。私が貴方の妻だということを人に知られた上は、もう貴方と御一緒に暮せません。私と貴方の間には子供がいないので、お別れしてしまふと、二人の間をつなぐ物は何一つありません。私は今ほど私に子供の産めないことを悲しく思つたことはございません。しかし事の次第が露見してしまつた以上、このまま地上に居ることは出来ません。一度下界の人と契を結んだからは私はもう天界に帰つて暮すことが出来ぬのでございます。これから先、貴方なしで暮すことの淋しさやを思うと又悲しくなります。今後は二人とも自分の道を行くよう努めましょう。

お別れしてもどうか私のことをお忘れにならないで時々は思い出して下さいませ」と云つて、彼女は涙をふき、下婢を呼んで別れの宴の仕度をさせ、傍らの簾の中から自分で織つた下着と単衣の二組をとり出し、彼に与え、「これを私と思つて大切にして下さいませ。私も貴方のお身を遠くからお見守り申し上げます」と云つて夫の手をとり、「ではいつまでもお名前残りがつきませぬ。もうお別れでございませう。貴方もお体にお気を付けて、幸福にお暮し下さいませ」と云う

北郡の役人となつてゐた。彼が洛陽に行く途中、済北の魚山のふもとを馬に乗つて西へ西へと歩いてゐた時、はるか遠く、道のはずれのちやうど曲りくねつたあたりに一台の馬車が止まつてゐた。彼は何んの気なしに馬を進めてゐたが、その車に近づくにつれて、どこかで見たことのある馬車に気がついた。それは彼が知瓊と夫婦になつた時、彼女が彼の元に来たその日に乗つてゐた輜軒に似てゐたのである。彼は急いで馬をその車のわきののりつけて見るとはたして知瓊の車であつた彼は馬をかりて、その車に近づき、側らの下婢にたずねた。

「つかぬ事をおたずねしますが、この車はどなたのお車でございませうか」

「このお車は知瓊様のお車でございます」

「おお知瓊の車か、それはなつかしい、一目会いたいものだ。どうかお取り次ぎ願ひたい。弦超が会いに参りましたと」

その彼の声に車の簾を押し上げて一人の妙令の婦人が顔をのぞかせた。知瓊である。彼女は五年前別れた時、いや十三年前彼と結婚した時とすこしも変らず美しい容姿であつた。

「おお知瓊。お前は知瓊だ。会いたかつた。お前の行方を随分さがしたぞ。お前が去つてからの私の生活は砂漠の砂のように味気ないものだった。もう私はお前をはなさない。さあ私と一緒に又仲良く暮そう」弦超はそう云うと彼女の車の中に入り込み彼女をつよくだきしめた。「私もお会いしとうございました。本当に今日は偶然にお会い出来てうれしゅうございます。私ももう貴方から離れません。又二人で一緒に暮しましょう。私の弦超」

二人は互にだき合つて別れた悲しみや、再会出来た喜びをかわるがわる話し合つた。そして彼は馬のたずなを家来に渡し、自分は知瓊と

の顔が解るようになった。威厳ある焔の叫びが校庭一杯に広がった。男子生徒は、勇ましい勢いで舞い上る炎のまわりをかこみ、歌った、女生徒は音楽に合せて踊り始めた。夜空のもとで沢山の女子が踊るということはこの間にも楽しいものであろうか。

やがて男生徒も女生徒をバートナーにして踊り出した。踊っている人達の顔には喜びの光がみなぎっていた。時折、赤マントの騎士が踊り狂っている中へ石油を注いだ。赤マントの騎士と若い男女の踊りの競争である。踊りに夢中になって、バートナーをチェンジせずに前後の人々に迷惑をかけている組も、あちこちで見られた。赤マントの騎士の向側で踊っているものは影絵となって、美しいメロデーに乗せて右へ左へ流れて行く。なごやかなこの光景を天のどこかで天使が微笑み乍ら見下していることだろう。

踊りに活気が出て来た頃は、もう赤マントの騎士は校庭を静かに天へ昇ろうとしていた。再び男女生徒が赤マントの騎士を取り囲め校歌を合唱して別れた。赤マントの騎士は校庭を静かに離れて行った。

再び校門を出て来た少女の顔は幸福と祝福と希望をイースト菌でふくらませたようであった。そしてその上に興奮という皮で包んだケークのようでもあった。

随 想

真冬の昼の夢

二年 高岡 征

我々は余りに自分勝手すぎると思う。他の人はどうなっても自分さえ

ろうか。それとほとんど底の生活までは降りず、きりのいい点で妥協すればいいのか。何億というキリスト教徒をこの世に持ちながらあの悲惨な戦争をも無くすることができないとは何を意味するのだろうか。キリストが十字架の死まで、人間の悲惨のどん底に降りていかなければならなかったような愛ではなくて、優越者の立場にたち、ただ他者の欠点のみを指摘し、表面に愛を装いながらそのうちに毒牙を蔵していたからではないのか。僕は幸福になりたい。しかし又善くなりたい。私達は真実には生きられない。それである人のいうように悪人になってやろうという気も時々する。いかなる人をも愛して交わることが必要だ。そして同胞の愛で許し合うことも。そして心の中の呪いを去り他の人の喜びを自分の喜びとして受けられるようにひろく、大きくになりたい人間の運命を運命として自分を鞭撻する。それがたとえ空しい努力に終わろうとも仕方がないのだ。

随 想

未来へ向って

三年 松本 幸子

第二の誕生ともいうべき自我の自覚、そして、早や高校生活とも後幾月かで終りを告げようとしている。如何にして将来を築き上げていくべきか。これは現在の私達にとって、実に大きな又実に重要な問題である。しかも私達は、この深刻な社会情勢の下に生きていかねばならないのだ。

さて、私の前に横たわっているもの、すなわち意義ある大学生活で

よければよいというような考えを誰でも少なからず持っている。

あらゆる人は、彼自身の善の為に彼自身の幸福のために生きていく。もし彼が幸福を望むことを止めた時彼はもはや自分自身を生きていくとは感じないであろう。人は彼自身の幸福を求める欲望と関連させずには、人生を考へることが出来ない。一体今日世の中にクリスチャンと自称する人々が沢山いる。しかし本当の意味のクリスチャンとはどういうものであるか。そしてそのような人がどのくらい存在するであろうか。キリスト教の生命の根源は「愛」である。「精神をつくして汝の神を愛し、己の如く汝の隣人を愛すべし」ということである。一見僕には矛盾しているように見える。即ち生きるということは、万人にとって幸福を求めることにはかならない。その同じ人間がそうやすやすと汝の如く隣人を愛せるものであろうか。「己の如く」かくしてこの愛に生きようとするものは、どうして自分より不幸な人間がこの地上に一人でも存することを坐視し得ようか。私達はいかにも自らの不幸や不運に敏感であり、しかも他の不幸に連なることが少ない。毎日私達がまがりなりにも学校に来、時間中にあくびをしている時にも、あの炭坑の奥深い陽の光もとかない所で、坑夫は汗と泥にまみれて労働している。裏町の屋内やアパートの片隅にはどういわれても私達がその自分をかえてやることの出来ないような不幸な人達が数え切れないほどいるに違いないのである。又原爆が落ち、戦争が終って十年経ったのに、病床に釘づけにされて動くことの出来ない多くの人々が今でも疚け体の痛みに、精神的苦悩に堪えながら、希望のない毎日を迎えているのである。このような人達と我々は自分をとりかえることが出来るであろうか。その隣人を愛すべしとの戒めが真面目に聞かれると人が降りて行かねばならない場所はこのどん底の生活ではな

ある。最近女性の社会的進出に目覚しいものがあるとはいえ、一般的には未だ未だ真の意味で認められていないとはいえないようだ。(私に言わせてみればこれは女性自身に考へるべきところが多くあり、一人々々の深い反省とその上にたつ自覚が是非とも必要だと思ふのだが)同様に女子の進学にも、たとえ表面に表れないにせよ微妙な問題が含まれているようだ。しかし自分の希望が他から屈せられた時、後にたつて一番後悔するのは希望を実現できなかった本人なのだから、こんな後悔はしたくないものだ。

私は大学教育の目的を、学問追求と人格完成におきたい。昨今、大学が就職の手段のように考えられていることは実に悲しい事実である。その責任の大半は社会にあるとしても、やはり青年は青年らしい意気と純粋さを忘れないで、学問と取り組んでいきたいものである。次に人格の問題であるが、先輩達の体験談にもある如く良き師を得るということは何時の場合にも非常に大切であり、従つて、教授との人格的接触に期待するところは大きいのである。とりわけ高校が予備校化している時、人格の完成を高校のみに求めるのは無理なことではあるまいか。最もその必要なのは二、三年のようと思われるし、高校生活中最も忙しいのもこの時期であるが。

以上二つの目的の達成に努力しながら、私は自分の進むべき方向の最後の決定をしなければならぬ。小学校の頃から私は、自分の中に存在するある力を意識しその正体をはっきりつかもうとしてきた。その力を十分發揮できる仕事こそが、自分の進むべき道であると信じている。だが、その向う方向を、おおよそその目標はついていないもの、今ここで具体的にこれ、と示すことは出来ない。否、私の場合はそうすることが危ういような気さえするのである。高校三年という今、

優柔不断といわれるかもしれないし、だらしないといわれるかもしれない。けれど、一体高校を卒業するかしないか位の年令で、どれ程自己を知り得ようか？ 私はいくまでも慎重に、揺ぐことのない実力をもつて、有能な社会人として生きていきたいのである。理想高き未来へ向って！



雲の山

一年中西光子

雲の山は果しない
雲の峰は彼方に続く
太陽はもはやかくれようとして
夕映の丘を照し乍ら
雲の山を染め乍ら
雲の山は高く 雲の峰は長い
誰かが登れぬ山 雲の山！
孤独の雲の山は
大きなあくびをする
雲の山には穴があく
雲の山は静かに動く
雲の山には草木が生えていない
雲の奥深くには
世の中の誰れもが知らない
神秘がある
静かなる雲の山よ！
威厳ある雲の山よ！
お前はどこへ消えて行く？

春のにおい

一年大津 司

小さなかわいいお坊っちゃん
春のにおいをしてるかい
「うん キヤラメルのおいだろ」
元気で丈夫なお婆さん
春のにおいをごぞんじですか
「ああ 椿と梅をまぜたにおいさ」
やさしい美しい娘さん
春のにおいしつてらっしゃる
「ええ 水仙のにおいでしょ」
おひげの長い学者さん
春のにおいはわかりますか
「ああしつてるよ 黒土のにおいさ」
とっても働く小使さん
春のにおいはどんなです
「石炭のにおいがきえた甘いにおいさ」
ごくろうさんですお巡りさん
春のにおいをごぞんじですか
「おお ねむけをもよおす光のにおいさ」



意地悪

二年小林茂子

スポーツの好きなハンサムさん
春のにおいを一寸一言
「なんといつても若葉のにおいさ」
失礼ですがおわい屋さん
春のにおいはどんなです
「春のにおいは無臭です」
お山で暮す強力さん
春のにおいはどんなかね
「岩についてる新こけのにおいさ」
所で真赤なポストさん
春のにおいはどんなです
「楽しい明るい手紙のにおいさ」
最後に最後にもぐらさん
春のにおいをおしえてくれない
「春のにおいはもち草さ」
みなさんどうですか
春のにおいはおわかりかい
こうですこんなのにおいです



あなたの
尖った意地悪な言葉の矢が
私の胸を
ぐさつと射抜いた
赤い血が
さつとほとばしり出たが
あなたには
白い血を黙って見せた
しかし あなたは
それにも目をつぶって
次々に矢を射る
私の心の中で
まっかな潮が
沸騰しているというのに

たこの糸

一年 石原 みのる

深山の雪もとけて
そのひそかなせらぎの歌声が
広い春の空に伝わる時
その歌声におくられて
百幾つかの「たこ」が
春の空を昇っていく
高い春の空には
梅の香が満ち満ちて
春を桜に呼びかける
今はのどかな春の空だが
やがて思いがけない突風が
そして嵐が
また木枯しが
それでも「たこ」は昇り続ける
嵐にたえ 木枯しにも負けず
細いけれども
鋭い強い糸を頼みに
この純白な一すじの糸が
「たこ」にとっては
かけがえのない生命の糸

そり糸の切れたとき
その「たこ」は流れる
地の底をめがけて

切れやすいひとすじの糸

純白の鋭い糸こそ

「たこ」の生命なのだ

のどかな春空に

多くの「たこ」が舞い上るとき

その糸の強かれと

折らずにはいられない

池と口論

二年 太田 美弥子

ほの暗い池のほとりに
立ちすくんでいる私の影
その影が今口論した私なのか
あんなに強くあんなに落着いていた私が
こんなに弱くふるえている
おのれの意見が悪い事を知りつつも
おのれがおれるべきを知りつつも

どうしてそれが素直に言えなかったのか
勝った筈の私の心が
こんなに痛ましくおののいている
足兄の土がもろくころげて
静かな水面に消え去る
私の空虚な心が
ふとその誘惑を感じる
ほんの少し前迄は
あんなににぎわっていた池のほとりが
今は暗く私の心のように淋しい

随 想

記録すべき

一九五五年を

遠 藤 百合子

十七才になる迄、どんな暗い新年でもどんな不運な新年でも、新年ともなれば、今年こそ、という気持は持ったものだった。しかし今年はどうしたものか、ロマンチックに「本年に幸あれ」等という気持になれなかった。一九五五年があまりに私を苦しめたからかもしれない。昨年の十大ニュースを考えて見ただけでも、今までになく自分と社会が平行して考えられるようになったからかもしれない。が、十七年間の子供らしい初頭の決意は、起きなかった。たしかに自分は成長したらしい。自分の主義の確立はまだなかなか

のことだろうが、一步一步大人に近づいていることを考えると、恐ろしいような、恥かしいような気分になる。この不安な状態は、いわゆるティーン・エイジャーの経験するものであろうが、私にはとてもこの不安を超越して行くだけの勇気がない。
社会の混乱に責任を負わせることは、ずるい考えだろうか。十年前の戦争に責任を問うことは許されないことでしょうか。この社会に貢献しようという、素直な気持になれない自分はひきょう者でしょうか。

一九五五年は私達の記念すべき年であるべきです。この記録すべき年の始めに当って、自分が何も自覚しなかったのを悲しく思います。私の人生の門出に当って、何んの感激もなく、星の夜空のような澄みきった気持になれず、昨年の暗夜のまま進もうとしている。私はどうしたら良いのでしょうか。唯努力だけがたよりです。天才等というものは存在しないのだということを誰れかの本で読みました。その本があまりに上手に書いてあったのかもしれない。ふだん、本を手にしたことのない私が、そんなむづかしい哲学まがいの本を読んだからかもしれないが、自分もその意見には賛成でした。「塵も積れば山となる」とか努力の結晶が天才と呼ばれるものになるのではないのでしょうか。

他人の世界のように考えられていた社会が、あと一寸の先に到来をまかまえているとなると、年頭の言葉も、軽るがるしく口には出されないうし、この記録すべき年に、唯一つ私の約束出来ることは、努力による成長だけです。社会に対する不満も、この努力によって、切りぬけることが出来るような気がします。

この新しい年にこのことばの永遠に続くことを祈り、努力の続くよ

う努力し、記録すべき一九五四年が、微光のさしはじめた現社会のよ
うに、私の人生に光の一束をなげてくれることを祈っています。

つれづれなるままに高等落書

「ユーモアを忘れるな」

二年 増山 登史多

本棚を整理したらサインブックが出てきた。

——泣いても笑っても中学校生活は今日一日という日、僕は級友と共にサインブックを持って職員室へ押しかけた。すでにやって来ていた卒業生達で狭い職員室はごった返していた。僕も込み合っている中を行ったり来たりしてほとんどの恩師の御忠告をサインブックに書きおろしていただいた。「しっかりとやるんだぞ」日頃尊敬していた先生に、激励されて職員室を出、やがて校門を出てきたのだ。

実は、この「ユーモアを忘れるな」という言葉は、このサインブックの中に記されてあった或恩師の御忠告である。

高等学校生活を過しつつある僕は、まだユーモアを忘れてはおるまいか？

——出校のベルが鳴る。おくれではならじと、かけ足で下駄箱へ。ゆうに一年は使ったバクバクなズックをつつけて、一目散に教室へかけこむ。セーフ。これぞわが高校生活のすべりこみ戦。やがて授業。クラスメートを陥入れようと面白半分にかかれた椅子を組み立てて

狂言

二年 高橋 俊章

僕が狂言をやる。そんなことを考えたことがあってあったらどうか。「俊章さん来週からあなたは狂言をするのよ。」或る日学校から帰って来た僕の顔を見ると姉は突然そうきり出した。まだカバンもおいていなかった僕はそれを危くとりおとすところだった。「僕が、ヘー。」あいた口がふさがらず、二の句がとび出すまでもの十分はゆうにかかったらう。「ななせ。我ががら愚問だと思いが、どもりながらやっというのへ」話して来たわ、来週からね、野村さんの所よ、私のお友達がいっしょに行きなさいね。」とおつかぶせるような姉の言葉がとんで来る。「だって狂言なんて僕知らないもの。」「知らない方がいいんですって。やってるうちにわかるわよ。」これでは残念ながら完敗である。僕はしつぽをまいてひき下がるより仕方なかった。

次の週の木曜、僕は否応なしに狂言師野村万作なる人の所へつれていかれることになった。彼は東京の隅っこの江古田に住んでいた。江古田三丁目でバスを降り、わかりにくい道を探しあぐねていると、かすかに妙な声が聞えてくる。歌とはおよそ趣を異にしている。時々日曜の朝ラジオからもれてくる謡の声に似ていた。僕はそれをたよりにやっど竹藪に囲まれたしやうしやな一構えにたどりついた。姉と姉の友達——これは会ったとたん目がとびこむように頭に入ってくる。といった人だ——。僕の三人は柄になく静かに門の前の鳴子をふった。古風なこの家には呼鈴のかわりに鳴子が下っているのである。内から

おいたら運悪く、社会科先生おすわりに……とすん。みごとに決った肩すかし。お調らべになったあぐけ前方へ無情に呼び出されると、うらめしや、マボンの尻は、昨日の激戦の後をたたえて、アンパン型にぬけている。道学先生いわく「昨日は、そのかつこうで帰ったのだな。たしいしたもんだな。あまあ極端に派手なのはいけないが学生は学生なりに、きちんとしてなくてはなあ。」小生は伸ばしたてのばさばさな、いわば山嵐型頭をかき、クラスメートは笑っている。やがて休みの合図のベルが鳴るといっきに下へ出て、昨日に勝る激戦を展開する。あぐけのはてに、華に……もう。そしてすばやく、持ち合せのワラバン紙で見事にあいた穴をそおと、ふさいでおく。再び授業が始まったが、面白くない。やがて、どこからとんだきたのかゴム消しの粒。相手をたしかめておいて、先生が黒板に向れると同時に、お返しを発射する。自然と共鳴して、またもや激戦が展開されるのである。先生は知ってか知らずか、一心に黒板をよこしていらつしやる。実は、お釈迦さんどころか、先生は、とうに御存知なのだろう。机に、青春を、いかに過すかなどと、インクで書いて、先生がまわってこられると、あわてて、つばきを、ふきかけて消したり、あくびが出たのを、みつかって、顔を洗いに行かせられたり、あばれて、右腕を折り、昨日の敵に筆記をたのんたこともあった。かく申す小生は、「む。強いてユーモラスにしているのではないが……、いや自然に表われてしまうのが、ほんとうのユーモアなのだ。そして、このユーモラスなところが、この小生の中には、まだ存在していたのだ」と独断して、はじめて、小生はく、と発表したものである。

x x x

はそれにかまわず「きつね、佐渡にきつねはないと聞いた。」と太い謡の声もれていった。しばらく立往生した末、招き入れられたのは玄関の脇の茶室風の二室、前に舞台を控え、床の間には能面がかかっていた。ここで僕はこれから自分の先生になる人を始めて見た。第一に「きれいだ」と思った。青白い細面に鼻の線がくつきりと高く、ひきしまった口元へ急角度をなして落ちていた。かみそりの刃のようにときすまされた冷たさと静けさを僕はその顔から感じて身内の引きしまるような気がした。——これが野村万作という人だとはあとで聞いた話である。——僕はこの人からうすぐらい茶室の中で「かけ川」という小舞謡を教えられた。「ここをどこぞともし人間問わば、ここは駿河の府中の宿よ。」ふとい中に何か神経のビリビリしているようなするときのある澄んだきれいな声だった。「ここをどこぞともし人間問わば。」僕は夢中で彼のまねをしてうたった。無我夢中、何をとなっているやら自分にはさっぱりわからなかった。頭がボーとすすんで、何度言われても「人とわば」とおとす節が出来なかった。悪戦苦闘、冷汗をかいたあぐけ、僕はやつと解放された。

その日から三ヵ月。不思議に僕の稽古は続いた。全くふしぎという他はない。

あの不健康な暗い茶室は僕に亡びゆくものを感じさせる。吉野朝時代に演劇としての形態がほほととのつたと想像される狂言は能に附随して五百年間その命脈を保って来た。安土桃山の最盛期をすぎ、御用演技者として江戸三百年の太平の世をこすと、次に来った西欧文明の波はこの古い演劇を徐々にいつめていった。その後第二次大戦。それは狂言の上にひきかぶっていた衣を一枚一枚はがしていったのである。或一つの階級による保護と独占。今狂言はそれから全く離れよう

としている。しかしそれを離れて成り立つものなのだろうか。あの滅法のびした小謡をはさんだ半写実ともいべき狂言がジャズのき横行する現代のこのリズムカルなテンポにのって行けるであろうか。能と違い、ずっと現代の感情に近いものをもっているが、それをつむ三間四方の舞台が象徴する狂言の象徴性を現代人が認めるであろうか。僕はこう考えてくるとあの四畳半にたんと坐って小謡を謡っている先生を思い出した。青白い弱々しい体に狂言の全生命がかかっているような気がした。その弱々しい体の中に秘めた強じんな生命力、炎のようなげいし熱情は静かな外面につつまれて機会があれば飛び出そうとしている。

「人間崩壊の危機」が叫ばれる今日、それは何と強い力であろう。やがて散る最後の光。そんな感がないでもない。しかしそこから僕達がうけついでゆくものは全くないものだろうか。我々先祖が生み出し、みがきをかけ、育ててきたその結晶は既に僕らには何も語りかけてこないものなのだろうか。僕はそうは思わない。

僕は先生のお父さんである野村万蔵さんにあつたと僕がいった時、彼は一心に面をうっていたが彩色をおえてふとあげた顔を僕の方へむけてはは笑んだ。ぎょろつかせた目だけがするどくそれをつつ赤褐色の顔はもし青かつたら河童というところだろう。

次に彼に会ったのは舞台の上でだった。彼はその時「木六駄」といふ狂言で太郎冠者をつとめていた。この狂言は冬の吹雪の日、主にたのまれて木六駄と炭六駄に酒を主の伯父の所へとどける太郎冠者が、あまりの寒さに途中の峠の茶屋でその酒を飲んでしまおうという筋のもので、その山は酒盛の場にある。彼はここで腰をふらつかせながら酒によってうずらを追う狸師の姿を滑稽化したうずら舞を舞った。万蔵

つくしんぼう

一年 奈良 弥生

毎年つくしんぼうが野山に出始める頃になると、私は戦争中のあの信州に疎開したときのことを思い出す。あれはたしか私が七つの時だったと思う。五反田の家の辺一体は強制疎開で近所の人達もみなちりぢりに何処かへ、疎開してしまつた。最後に残つた私の家も、家を壊される前の晩の三時頃までかかつていろいろ準備をした。そして翌朝早く信州へ向つて旅立ったのだ。その当時の汽車と云えばものすごいものだった。やと父が知人に頼んで席を取ることが出来たものの、駅々で乗る客には道徳も秩序もあつたものではない。やとこの思いで長野まで来たけれど、今度は長野電鉄に乗りかえねばならない。

この沿線は白樺の幹のようなリンゴの木がどこ迄も長く続いていて、私達は始めてホツとした思いだった。長野には父の妹家族が住んでいるのだ。私達が着いた日は良く晴れた三月の暖かい日だった。従姉達に案内されて附近を散歩してみたが、とても空気が良くて囲りはあまり高くない山々に囲まれ、家の前には道を隔てて、水のきれいな名前は忘れたが大きな川が流れていて、鶺鴒がいつも石をたたいていた。それから一ヵ月して、私は家からそう遠くない温泉場特有のだらだら坂の上にある小学校へ入学した。その頃の小学校は六年の上に、高教科二年まであった。そこへは渡上林の方からも山を越え、通学していた家からは、小学校二年の従姉と私とが、毎日仲良く学校へ行くの

「うずら舞をみまいな、うずら三羽とらえんと弓に矢をつがえたア1。」とはやしながら立つて舞いかける彼に茶屋の亭主は「うずら舞を見まいな、うずら舞を見まいなア。」とはやしかける。くれめめた宵やみの中にその声はびんびんひびいた。僕はそこで泣きたい程リアルな反面、ずっとんきょうに野放図なのどかさ、ばかばかしさをいやという程かんじさせられたのである。

狂言に登場してくる人物の一人一人がかもし出す悲喜こもごもの感情が現代に生きている我々にそのままつながるものであると共に、そこにかもし出される明るい雰囲気は我々の心をあらに清め、少年の昔にかえしてくるのである。東洋的な極度の圧縮を加えられ、ねられた表現は永年のげいし修業を経た個体によってはじめて実を結び、そこからほとぼり出る火花は直接僕らの胸にとんでくる。きりつめられた美、それを能に感じる僕は素朴な人間の語りかけを狂言に感じるのである。するといい諷刺もベースもほどよいユーモアにつつんで狂言は我々に語りかけてくる。素朴な我々の先祖がたまの祭りのんびりとうちくつろいで楽しんだ狂言の「あそびの気分」はこの切迫した世代に生きる我々の心を明るくしてくれるのである。その素朴な失敗に腹の皮がよじれるまで笑い続けずにはいられない。狂言はそんな人物でうずめつくされている。その素朴さ、僕達はそれをもう一度見なおして見る必要がありはしないだろうか。



だ。途中の道には、つくしんぼうが沢山あつた。その朝も私は従姉と急ぎ足に歩いてしたが、ふと線路道に頭を並べているつくしんぼうが目に入った。私は慣れない所へ来てお友達もなく遊んでいる四つの弟のことを考え、急に持つて行ってあげたくなり、とたんに学校のことを忘れてしまつていた。二人で相談するともなく摘み出した。そのうちに気が付いた時はもう余程たつていたのである。大急ぎで学校へ行ってみると校内はしーんとしていた。私は従姉とは教室が離れていたのに、黙って別れてからひとり自分の教室へ入って行つた。授業はもうとくに始まつていた。そうつと後の戸を閉めて教壇に立つていらつしやる先生をおすおすみると、眼鏡をかけたやさしい男の先生がにこにこ笑いながら私の側まで歩いていらした。生徒達はみな私に注目していた。私は恥かしさでいっぱいになりついにはわあわあ大声をあげて泣いてしまつた。やさしい先生は「弥生ちゃん、どうした、もう泣かんでもいい。」と、おっしゃって、いくともいけども頭をなでて下さつた。私の足もとにはつくしんぼうが沢山散らばつていて私が先生は一つ一つ拾つて私の手の中へ入れて下さつた。やがて帰りにには又従姉と一緒に二人で黙って歩いた。従姉は何故か遅刻したことにについては何もいわない。きつと先生に叱られたのだから。私は母には決してこのことはいうまいと思つた。なぜかという母は学校のことに聞かしては、ことの外、真剣になる性分だったから。二人で家の近くまでやつて来ると、空の遠くの方に鳥みたいなのが飛んでいくので何だろうと思つて見ると、わいわい近所の人達が出て来て、「あれは飛行機だな。」とどいていった。それはどこかは全然、戦争とは別世界だった。河原のここかしこの小屋からも山の間々からも、もくもくゆっくりにゆげの立ちのぼっている静かな温泉場だったから。弟は私が取つてきた少ししなび

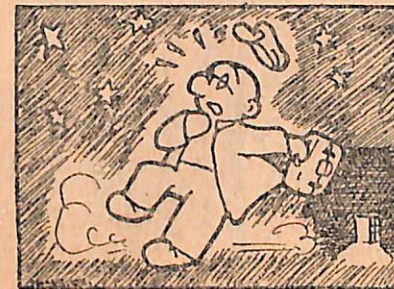
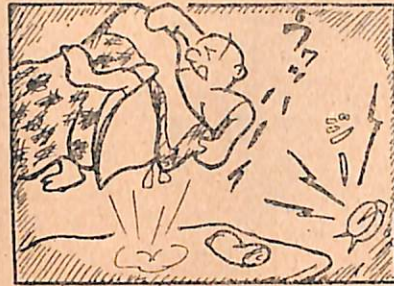
たつくしんぼうを、とても喜んで大事そうに箱につめていた。私はそれを見ながら、学校であったことを思い出して恥かしくなり、もう二度とこんなことはしないと心の中でくりかえしていた。信州での生活は二年生の夏まで戦争を感じないままのんびりと過ごすことが出来た。まもなく東京の三鷹へうつって来たが、それにしてもつくしんぼうの時期と共に、このことは、いつになっても忘れることが出来ない。現在私は高校生になってもよく遅刻しそうになるが、このことは私の心の奥にくすぐったく潜んでいる。

漫画と私

三年 山下 進

「これからは漫画なんて書いていないで勉強しなくちゃダメだぞ。」こ

ついでに
いつものくせで...



れは高校にバスした時、中学の先生からいわれた言葉だ。あれから三年、はたして漫画を書かないでいられたのだろうか?

そもそも僕が漫画に興味を持ち始めたのはいつからかと云われてもはっきりした線を引くことは出来ないが、小学校の五年の時にはすでに幾分なりとも興味は持っていたようである。というのは、その頃書いた漫画(とはいっても、十二騎位の可愛らしい漫画だ)がその頃使っていたノートの間にはさまれているのを見つけたからなのであるが……、又、厚いB六版のノートにやたらに書きつけていたのも、この頃からのように記憶している。

下手の横好き、確かにそうかも知れない。授業がつまらなくなると教科書の隅に漫画を書いていたものだ。だから先生のそういうのも、無理はないわけだ。昨年の夏の同窓会の時、先生に「書くなどいわれても……。」と謝ると、「まあいいよ、大いにやりたまえ。」とは。そ

早春のある日

二年 市田光子

のせいでもないだろうが、数多く打てば……の諺の通り一昨年、雑誌(といっても一年四回発行のある同好会の雑誌だが)に三枚出したうちの一枚が載った時のおかしいうな、くすぐったいうな、嬉しいような、変な気持は今もって忘れられない。あれから四度凸版になったが、その度にこの気持は再現される。又、漫画コンクールに入選した時の気持も。

妹達と漫画の本を奪い合い、同じ漫画映画を三回は見に行くのを始めて、「又……」と、両親達はいうが、まあ前者の方は別として、後者はそれ程好きなのだ。これは野球の好きな子が、野球をやめるといわれても、やりたいのと同じで、どうしても少くは三回は見たい性分なのだ。以前は、両親も姉も、漫画を書いていると「又やっている……」とけなしていた。その度に激しくは答えたが、今では何もいわなくなってしまった。

昨年の夏から、思いつくままに書きつけて(書き落しもあるが)無地の大学ノート二冊を費し、他に中篇を二本書きかけている。よく親戚の人々、友人から、「漫画で生活して行くつもりか?」と聞かれる。しかし、今日の自分として、それだけの自信もないし腕も持っていない。

これから先? 勿論ヒマを見て書いて行くつもりだ。たとえそれを見る人がいなくても……。なぜなら、ば漫画を書くことが自分の趣味であり、漫画を書いている時が、最も楽しい時の一つでもあるからである。

乙女椿に春が再びめぐって来た。そよそよと吹く風が時にうすら寒く感ずることもあるけれど、それは流れ行く雲が薄く太陽を包んだ時か、置が空一面にひろがった時である。けれどその雲も知らぬ間に何処ともなく消えて暖い陽がぼかぼかと猫の背に照っていると「やはり春だ、春が再びめぐって来たのだ……」という感じをはっきりさせる。春めいた日の光、庭先の水仙は小さな白い春を咲かせてやわらかに春の中に呼吸している。木梢を渡る風は春らしい若芽の香、しつとりとした土の香を漂わせている。

縁先に出て春浅い日光をあびていると……静かな庭の赤い実をつけたおもととの葉影に何か動くのを見た。もう虫がいるのかしら……と思つて急いで行ってみた。蜘蛛だ、はねるような歩き方をしたその蜘蛛は枯葉をくぐりすぐ見えなくなった。こんな小さなものがどうしてこの寒かった冬に耐えて生きているのだらうと思つた。

遠くからか鳥が聞こえて来るチチ……とのんびり聞こえる。あの小鳥がこの嬉しい春を持って来たのではないだろうか、私の足もとに少しもり上った土が見える。何かがきつと芽を出すのだ。暖い陽の光を受けてすべてのものが動いている。木の芽も草の芽も皆威勢よくのびかっている。それでは蜘蛛のような可愛らしい動物が出たのも不思議ではない……などと思いがらうとうとしてみると、その時をよそよ吹いてくる気持のいい風、人を眠りに誘う風だ。ふと目を開けて見上げるとそこには早やちらほらと白梅が咲きかけているではないか。

紅い炎の中に

一年 高橋 由喜子

にぎやかな東京を離れた遙かな山村のあばら家の囲炉裡には暖い火が燃やされていることだろう。その紅い火を、静かに見つめているとやがて少女の眼は輝き類ははてり生き生きとして来るだろう。紅い炎の暖かさは少女の囲りを包む。炎の快いリズムと共に。

たしかにそれは暑い七月のことだった。私は家族と共に、淋しい山里の村に疎開していった。疎開した家は小さな山の天辺の小学校のすぐ前にあった。とに角門のすごい家だった。立派というのではない。だっだくって時々青大将が天井からお目見得するのには弱った。村人たちに聞くと青大将は代々の古参だそうだ。初めて青大将にお目にかかった時は、腰が抜けたがおとなしい蛇だというのでそれから一向に驚ろかなくなった。小学校の庭の周囲には大きな桜の木が沢山植えられてあった。これには、とかげや毛虫や蛇がしばしば見受けられた。村には実さんという不思議な少年が居た。彼の唯一の友達はある黒い大きな牡牛だった。よく私達が小学校の庭で遊んでいると校門の向うに通かに続いている一本道をその牛に乗って、まっしぐらにかけて来ては私達をかわがらせた。そのような時私達はきょあきあきと校舎の中に駆けこんで下駄箱の蔭から首を出したり引つめたりしたものだ。小学校の東側は畑が続き小さな山々がうねうねとして見える。その山々の傾斜地には緑の段々畑が置かれてあった。畑は桑畑が多かつた。

び出す。「随分長いもんだなあ」と思わずつぶやく。ひゅうひゅうひゅう。お祖母さんは黙々と同じことを繰り返す。見ている方が疲れて来る位だから全く根気の要る仕事だ。暫く同じことを繰り返すと、お祖母さんはやつこらしと腰を伸ばして、焦げ茶色の丸太の棒のような腕でどんどん腰を叩く。「さあええ物をおまえらにやるべえ」お祖母さんは私達をおも屋の方に連れて行くとかまどをそこそこさぐっていたが、焼きたての見るからに美味しそうな「おやき」を一つづつ手の平に載せてくれた。ゴクンと唾をのみ込むとお祖母さんにお礼をいった。又、山吹きの垣根の横を通ると、私達は田舎道を意気揚々と引き揚げた。外には夕暮の白いもやがあつたけれど私達は大満足だった。まだ大分熱さの残っているおやきを手の平の上ではんぱんばんと舐らせながらその時のさつちゃんのものまね鼻と鼻とが毒のように真赤だったのを覚えている。

からふと

二年 平 友 恵

樺太——。なつかしい樺太ノ。その名を口にしながら、早くも十年の月日が流れようとしている。楽しく思い出も悲しい思い出も全部つめ込んでいるオルゴール。私はいつもそのオルゴールの蓋を開け、いろいろな思い出に耽るのが好き。眼を閉じれば今もありありと浮ぶ古里の雄大な眺め、異国情緒豊かな故郷の町、「白鳥沢」は、樺太も北の果、国境に近い所だった。小高い山を控えて大きな小学校が建っていた。私はいつもその裏山に登って海を眺めたものだった。天

た。桑の赤いつぶつた実がなる頃になると友達と一緒にかごとを持ってそれを採る為に桑畑まで遠征した。私達はそれを「桑いちご」と呼んでいた。大して美味しくはなかったが私達は、沢山採る競争をして「はれこんな採れたぞ」といっては自慢し合った。小さな山や丘が連なっている急な傾斜地や坂が多かった。その中でも「きゅうざか」といわれているその名の通り、すごく急な坂があった。竹藪の続いているこの坂は近道としてしょっちゅう利用された。山の麓の役場迄行く時は母とよくこの道を通ったものだ。急な上に大きな石がごろごろしているからうっかりつまづくと「石と共に落ちぬ」で、下までころげ落ちる心配がある。そこでおつかかなびつくり一足ずつヒョコヒョコ降りたものだった。蚕が蛹になる頃になるとお友達と一緒に近所の山田という家に見物に出掛けた。山吹きの垣根の横を入ると、苦の生えかかったつるべ井戸がある。鶏がクックツツと餌を拾っている。牛小屋の前を通ると、「ンモウ」と間の抜けた顔がぬうつと現われる。牛はどうも好かない顔をしている。汚なくて馬鹿みたいな声を出す。煤けた戸をくぐると、暗い土間の隅の七輪の上に浅いお鍋のような物が掛けられてあった。中のお湯はぐらぐらと煮立って、覗くとそのお湯の中に白茶けた小さな卵型の物が沢山揺れていた。これが繭だ。なと思った。とポテポテと戸口の外に音がして葉草履をはいたこの家のお祖母さんが入って来た。「見に来たのけえ」と私達に向つていいながら日に焼けた顔をほころばせてしわの中で笑っている。「うん」私達は同時にうなづいた。お祖母さんはよこいしょと黒ずんだ椅子に腰かけると煮立っている鍋の中から繭を取り出し糸の端を引っ張り出すと奇妙な恰好をした糸巻きにひゅうひゅうと巻き出す。慣れたもので、その早いこと早いこと。小さいのにつづつ繭からどんどん糸が飛

気の良い日には、間宮海峡を隔ててつ連の陸が望まれた。その陸影を見ながら夢ははてしなく拡がり、まだ見ぬ国に仄かな憧憬を抱いていた。

私の家から三里程を伝い、山路を越えて行くと四軒ばかりの淋しい漁村に出る。その中の一軒は、私達の親しくしている家なので土曜日には兄や姉に連れられて、よく泊りに行ったものだった。途中にはわずかに一筋の陸で海と遮えがられている湖があった。そのほとりには「ゆりや」や「あやめや」はまんどうがが色とりどりに咲き乱れていた。私達はそこを遡行くと一休みして、花を摘み、お菓子を食べて歌をうたつては元気をとりもどしたものだ。静寂とした山路では、前を横切る「リス」にも悲鳴を上げ、曲り角の多い所では皆は驚かせようと、先に行き、しげみに隠れて野バラの棘に引掛かれ、泣いたこともあった。漁師の小父さんの家につくと、早速舟に乗せてもらって網を引き上げたり、魚を釣ったり、終日海で遊んだものだった。

思い出は限りなく美しく、なつかしい。しかし、美しく、楽しいものばかりが思い出ではない。呪わしい戦の嵐は、この美しい自然をも襲った。陸から、海から、空から。私達は戦争の火の手を受けねばならなかった。避難。私達は、夜を日に繼いで南下した。今思えば、いくら逃げまどつたところで、小さな島の中、逃げおうせるものではなかったのに。燃えつつける民家のそばを抜け、雨にあふれた田舎道を膝までつかけて歩く。文字通り、火の中、水の中の強行軍を続け、その間絶えず飛行機の爆音、機銃掃射の音、爆弾の炸裂音等に怯え続けていた。ついには、路傍に横たわっている死体、眼の前で弾を受けた人が死ぬ。そのようなことさえ、もう馴れていた。あぁなんて悲しい悪夢だったことか。

ソ連領となった今では、樺太に昔の面影はあるまい。進歩した機械技術は容赦なく自然の美を破壊し、近代化を急いでいることだろう。私は今から何年、何十年後でもよい。日本人が再び樺太に渡れる時が来たら、必ず故郷の町を訪れよう。そして過ぎ去った昔を偲ぼう。夢でもよい。私はその日の来るのを待っている。

私の抱負

三年 香川 耕之介

我々はよく我國の近代的国家としての体制の跛行性をきかされる。これは維新より急速に近代化した我國には宿命的な矛盾の一つである。我々が歴史が学ぶ時、経済史に於てこれを発見することは多大である。欧州大戦に於ては漁夫の利を占め、大戦後は不況のあおりをくられ、それ以来世界の動向に左右された我國。国民が勤勉であるに拘らず日本が西独のような経済復興ができぬのは何故であろうか。それは日本人が未だに真剣に国家的に物事を考えない狭隘な性格の持ち主であるがためだ。一がいにいえぬかも知れぬが、いわば世界的な国民では未だ無いというのである。日本人のこの考えを是正するにはより多くの現実に立ち向ってきたえられねばならない。国民的には優秀であり、個人的には欧米人に伍して堂々活躍する日本人は集団的な訓練に欠けているとさえいわれる。西独のフォルクスワーゲン自動車会社は、焼跡のバラック中に機械だけは最新式のを備え、その工具は不平もならずにそこで起居しそれを運転して今日の隆盛を見た。日

を隆盛に導きたい念にかられる。

以上は私が以前から不満に思っている経済面を齒がゆく思つて書いたのではない。我國のその方面の人々は個人的に尊敬されてしかるべきである。私がその方面を志していても、必ず理想通りにゆくとは考えられぬ。まさに「神のみぞ知り給う」である。あくまでもこれは現在の所感であつて私の抱負は二転三転するかもしれぬ。私としても新時代の人間として従来の立身出世欲のみを持つわけではない。只父母の期待を裏切るだけの勇氣が不足しているが爲である。この抱負を書くに到つて私が十二才國民より進歩していない一員である事実を新しく認識した。

母の死

一年 十河 昭男

私が小学校の六年の秋であつた。楽しみにしていた運動会が終つたその夜中に、母の苦しそうな声に皆目をさました。母は背中がつつて大変苦しいと言つていた。皆びくびくして起きた。私が立つて電燈をつけ背中をさすつてしばらくすると、母はため息をついて、「心配させてすまなかつたね。もう大丈夫」と言つてすぐに寝てしまった。翌朝、母は皆が起きてまた寝ていた。熱が高く下痢をしたようだった別に悪いものを食べた訳ではないのである。もし何か食べたとしても母一人で食べる訳はなく、皆が同じ物を食べる訳である。そうすれば我々も母と同じ症状でなければならぬ。医者に見てもうかうに言つたら、「二三日寝ていれば治るから」と言つて寝ていた。二三日する

本人にそれだけの熱意とそして世界的な國家観があれば幸いである。国力の回復は経済がその主なものである。日本が正常な経済に持つてゆくには輸出振興政策や経済立直しへの熱意の不足がそれをばんでいる。第二に我國の機械の老朽度が商品に精密度の低いものとしていし資源の不足はコストを各国並みにしない。大戦によつて市場を失つたことは致し方ないが未だ未だ売り込む余地は残存すると信ずる。又他國の經濟援助をより適切に用いねばならぬ。我國は外見は近代國家ではあるが、中味即ち人間は何世紀も前の古い頭を維持している。日本人はより世界的な視野を持たねばならぬ。私は今の我國の實情を見て、これを痛感し、又經濟の發達が國民をして國に對する信頼と愛情を抱かせる遠因になると信じた。勿論經濟振興には、科學の協力、施政者の積極的具體的援助、國民の耐乏……これは國家的な視野の上に立つ真剣なるもので座なりではない……それと實業人の綿密なる計画とたくみな商取引等が必要である。私はその一環として經濟方面に於て我國を隆盛に導きたい念にかられる。

中國との貿易が云々されているが、私は英國のゆき方が我國の模範となるだろうと思う。彼は戰勝國我は戰敗國というかも知れない。しかし中國は我國と最も古い最も親しい親友である。我國の政治家も中國との關係は英國に見習うべきだ。大人の國英國を見習つて中國と友好的な關係に入りたいたいものと切望する。

世界は今や新段階に入っている。資源のない日本、世界的に立ちおかれている日本、人口の多い日本、我々はあらゆる國に門戸を開かねばならない、丁度ベリが来た時のように。私は今の實情を見てこのことを痛感し、又日本人の偉大な發展とその頭腦を誇るに足る輸出が爛頭の急務であると信じる。私もその一環として經濟方面に於て我國

と、ますます症状が悪化していくので、医者に見せると、医者は「はつきりとは言えぬが、どうも赤痢のようですね」と言つた。皆は大変驚いた。すると、医者は「こうして家においておくのは危険だから、入院させた方がいいんですがね。病院の方は私が荏原病院の方に電話してすぐに自動車呼びますが」と言つた。父はそれを承知した。すると医者はブドウ糖の注射をして帰つていった。その後すぐに入院の用意をして病院の自動車の来るのを待っていると、三十分ほどして来た。「十河さんはこちらですか」と言つて担架を手にした二人と消毒係の人が入つて来た。消毒係が室中を隅から隅まで消毒をし終ると、母は担架に乗せられながら淋しい微笑を浮かべて、「心配しないでね。きつと良くなつて帰つて来ますから」といつて、父と兄に付きそわわつて、自動車の中に消えた。ただ一人残つた私は母が再びこの家に帰つて来るとは思えなかつた。そう思わずにはいられなかつた。なぜなら毎年多くの人が赤痢にかかつて殆んどの人が死亡する。全快して退院して来る人々はごく少数であるからだ。

しばらくして父が元氣なく帰つて来た。兄は付きそいとして病院にのこつたと言つていた。

それから一カ月たつた十一月三十日の夜、私は父の帰りが遅いので心配していると、兄から電話があつて、母の危篤を知らせて来た。父も連絡を受けて病院へ行つていふとのことだつた。興奮して齒ががちが鳴るのを止めることが出来なかつた。それからすぐに病院にかけつけたが、すでに遅かつた。裏門から入ると、母の死骸が車の付いたベットにのせられ、周りに父と兄のほかに一人の看護婦が付きそつて別棟にある死亡室に運ばれて行くのに出あつた。

母はとうとう死んだのだ。やっぱり家に歸つて来られなかつた。母

が家を出る時に言ったことを考えると、涙がほをつたって流れるのをどうすることも出来なかった。

失敗して母にしかれた時のこと、母にそむいて口答えをした時のことを考えると、母に対して申し訳ないという気持ちが起って来た。こういうことの起るのを予期していたなら、あんなことはしなかったのに……と。今頃そんなことを考えたところで母が生きかえる訳ではないのだが、そういうことを考えずにはいられなかった。

どうして死んだのだろう。病気だから死んだのには違いないのだがどうにかして助かる見込みはなかったのだろうか、という疑問がまたしても起って来た。母の死というものを経験したものは、私のこの気持ちを理解出来るだろう。経験しなければ絶対にわからない気持ちなのだ。

父の話によると病院でもはっきりと赤痢とはきめかねたそうだ。それで明日母を解剖して調べると言う事だった。翌日になって解剖の結果は穿孔性の腹膜炎とわかった。後日、親類のものが集り葬式が行われた。

出発に際して

三年 石塚千秋

正に記録すべき一九五五年となることを、一年の最終の夜、除夜の鐘を聞きながら去る年と、おしよせて来る年に大きい希望をかけて、私の第二の誕生を自分自身にいい聞かせたのがちょっと前の事。高校を卒業すれば、椅子と机と壁の暖かい囲いなどない。まして良い加減な生き方では生まれて来た以上人間として恥かしい。速く北の端から

一つの願いは良い親友を得ることだ。それから尊敬出来る人を。

人と人との関係は生きて行くには是非とも必要だ。よく小説などに老人となつてから一人生活する淋しさを身に感じ全財産（一人者の老人というのとはかく大金持だ）を捨てて……などがあるが可哀想というよりか罪のような気がする。

総て未来の幸福を願うことが現在の生活を明るくし、名曲を聞いてすべての人を愛することが出来るように……。人を愛することだ。

物事を善意に解釈することがいかによいことか。この一、二年というもののこのように生活して来た。時々自分を甘やかしているのとはつきりわかるが、このように短い時間に書く私は日頃思っていることをすらすらと書いてしまいくせがある。今の場合もそうで、「記録すべき一九五五年をなどと云われると前後して思っていることを書いてしましました。書き終つてからこんなこと」と思うことはあります。ここに書いてなくとも言葉に表わせない不安。学校から出て行く不安で一ぱいです。自信などすくおれそう。ただ「努力」と「時」がこの不安を取り去ってくれることと思う。それは寸前の未来を信じていなければ現在の生活を守って行くことも困難であろう事を思つて。

父

一年 漆原嘉代子

この間まで、私が幸福だなどと考えたこともなかったが、近頃珍しく、「ああ、昨年の十一月頃までは幸福だったけ」とつらつら感じるようになった。あの頃は父も元気で、私が失敗などすると、がみがみ叱りつけ、私が涙を出しても平気で叱りつづけた父が、今ではお正月

聞かえてきたすんだ鐘の音にも似て、私達若い者が苦しい門出を開いて素晴らしい出発にしたいものだ。

諺にもある通り何事も始めが肝心だ。新しい年も迎えたし、三年間の高校生活にも終りを告げる年だ。私には運の良いことに希望した仕事を実現しそうだし、もし実現したのなら、それこそ記録すべき三〇年であることに違いない。希望に満ちた年の次に来るものが決して楽々としたものではない。「平家物語」にも書いてあるように栄えるものが亡びるのはこの世の常だ。人間の出来るかぎりの力は滅亡するものを止めることにあると思う。現在の世の中といえは憂世に等しいものばかりだ。民主主義と言つて人間を尊重している一方（これはまだまた文字だけのこと）善は悪の前に屈しなければならぬ。これは今の若い人々には痛切に感ぜられることだ。就職にしても進学にしても（未だ進学は良い方だ）自分がしたい仕事は中々出来ない状態だ。この苦しい経験を持ったならば今の若い者が大人に成長した時には二度と同じく繰り返さないことだ。

何時も感じるのは苦しい世の中に生きている人間がなお活動を続けているという事実だ。それは未来を信じているからこそ、たとえ日常の生活が平凡に貧しく終ることも一夜明けて太陽のかがやくのを待っているからだ。今このようにいろいろと一年間を希望に輝いて眺めている人間というものは同じことをくり返しがちであるから又去年のように暗い十大ニュース的な問題が十のみか二十ぐらいあるかも知れない。私の日記帳にしても今までの学校生活のように何にも侵略されない日々を書き続けることは不可能に近い。私は今、本当のことをいえば不安で夜もゆつくり安まらない。学校と社会、私にはどうしててもこの社会というものが冷たく冷たく感じられる。その中であつて

頃からずっと床に就きつきりになり、「ああもうだめかな！」などと心細いことを口ばしり、涙ぐむようになってしまった。余りの変りように私もつい涙がでてしまう。天気の良いときは床の上に座り、「もう梅の花が咲いたか」とか、「道に草が生えたか」などと、聞かれると、変に、胸の中が湿っぽくなる。「ウン。もう梅も咲いて来たし、水仙もつぼみをもつてるよ」と答えるのが精一杯になってしまふ。又、自分の手をつづく見て「ガンジー王のようになってしまった。ようきが良ければ良いが、だめかなあ！」なんて、云われると、いたたまれなくなつて庭に出て、初めて梅の花の咲いているのを知り、「ああ、お父さんの云つたことがあつた。」

春めいて来たことを知り可笑しくなつてしまふ。父の兄弟が忙しいため、お正月来たきりなのを、とても淋しがつて、「ちよいちよい来ると云つたのに、来ないのかあー」なんて云われると、いつも兄妹喧嘩ばかりしている私が恥しくなる。母の兄弟が近いものだから、ちよくちよく来てくれると、とても嬉しそうに、無理をしても起き上がろうとする父を見てみると、私も訪ねて来てくれる人を拝みたいような気持ちになる。健康だということはなんて幸福なことだろう。私は今何も要らない。ただ父の病気が良くなればそれで良いのだ。なにも元のように働けなくても、ただ健康でさえあれば良い。この望みもかなえられなければ、私が学校を卒業して、私の働いて得たお金で、父の望む物を買ってあげたい。人間なんて何年生きたって損はないはずである。でも私は、この得がたい経験により、何より尊い親のありがたさを、しみじみと味わうことができた。親と子。兄妹。この関係は切っても切れない尊い関係にある。

私は床に入り、「あしたも学校が終つたら、早く帰って看病してあ

げよう。私にとって看病できることが唯一の親孝行であり、一番幸福なときなのだ」とつぶやいた。

友 達

一年 吉村 和 洋

昨年の暮から第十八回めの元旦を迎え、僕は故郷に帰った。

故郷といっても真の意味の故郷ではなく、疎開地なのであるが、僕の歴史に大きく一頁をとったところなので、自然故郷たらしめられたのである。五年も住んでいたところなので親戚もないところだが、案外気楽に友達のとこに世話になれるところだ。今度は僕の中学時代の担任の先生の宅に御世話になった。

そのようにして、大晦日を迎え、その日は中学時代の親友数人と、先生の宅に集って例年のように一晩中ノースリーピングで遊び明かした。新聞紙を丸めて相手に対し、「勝つてくるぞと勇ましく……」の歌を歌いながら、ジャンケンをする。そして勝った人が丸めた新聞紙で敗けた人の頭をたたくのである。たたくとあまり痛くもないのに、でっかい音がするので面白い。又たたきのに気を奪われて、ジャンケンが出来なかつたりする。こうして笑い明かした朝、新聞を見ても目がボーッとかすんでよく文字がみえない。又無性にねむい、しかし何となく快よかった。

我々のような青春期の人々が大学の入試のために、顔を青くして机にかじりついていたり、或いは就職難に悩まされて沈みきっている。少なくともこれが青年の送るべき人生なのだろうか？ 僕にはこのよ

て来た。が、しかし、同時に、大部分の人間はそうした名声を得たときにもつ、ある特殊な心持を彼も又もたらした。又悪環境（この学校の商業科はあまりよい友人がいないという）がそれに作用して、彼はどうも横道にそれ始めたようだ。という話をその友人から聞かされたのである。信じられなかった。そんなこと全然考えられなかったのだ。しかし又、友達があつてはすまないと思つたとき、僕はどのようにしていいかわからなくなつてしまつた。○君は大晦日の夜は一緒に笑いこけたら、又その外にも何度か会つて楽しい正月を迎えたのに……。こうして暗い気持ちのまま、正月の三日、この地と別れ、もはやその他の多くの友達と別れ、さびしく、車中の人となつた。上野へ着く間六時間というものは、唯○君のことで頭がいっぱひだつた。

人間がこの世界に生存を許されたのは、偶然か必然か、それは知らないが、兎に角、我々が今、こうして自然界の生存していることは誰しも否定出来ないことである。こう考えると自然という一つの屋根のもとに住んでいる人間の間には、たしかに何らかのつながりがあるように思うし、又あらねばならぬと思うので、僕が○君と親友であるということも加えて、彼を救い出すことは当然のことである、と思つた。僕は上京後、早速彼に長々と手紙を書いて出してやつた。又その他にも、もう一人の親友であり、○君にとつても亦、親友であるA君に（A君は現在S高校の普通科で猛勉強中、中学時代同じ野球部のセンターとして活躍）○君との友情を一層厚くして、彼に善道を歩ませてくれ、という風に手紙を書いた。

その後しばらくたつて、又もう一人の友達（この人は女の人で現在は当地から二時間ほど汽車で離れたところの女学校に通っている）に、中学時代は○君と仲の良い人だったためもあって、○君のことを詳し

うな生活が正しいとは思えない、いやいやこんなことは誰だって知っているんだ、それにもかかわらず、僕はこうした生活をしなければならぬ。一体どうしたことなんでしょうか。"Ch esararar"（運命にはさからえぬ）である。こうした虚偽と絶望の中で、なお一点の明りを求めて生活せねばならない自分達がたまらない。たまにはこうした虚偽と絶望から脱け出して、解放されることも無意味ではない、と、このように考えたためにその朝は快よきを感じたのだから。そして町の神社に朝の参拝をしたときは、全く心も落ちついて、これが真の幸福かとも思つた。

こうして楽しい正月を、先生や親友と送つて四日間の滞在を済ませ帰京する日を迎えたが、その日の午後、ある友人から僕がかつて考えたこともないような話をされた。

僕の中学時代は野球生活だったといつても言い過ぎではないと思う。飯より好きな野球だったので中学一年に入ると同時に、早速野球部に入れてもらった。毎年の例だったが一年のときは、三十人から四十人位入部してくるのだが、猛烈な練習に、皆途中でへたばつてしまつて、結局四、五人が残るだけとなる。幸い僕はその練習にも耐えることが出来て、三年のときは、ピッチャーを、又主将をつとめた。そうして選手が一人々々の努力と忍耐によつてこの年も、先輩から受けついで立派な伝統を何んとか守り抜いて、僕の野球生活（中学生生活）を終えたのであるが、この間、僕の相手役として、キャッチャーを努めてくれたのが、親友、○君であつた。彼は人柄といい、性質といい。僕には申し分ない良き友である。彼は中学校卒業後、S高校の商業科に進学し、一心の勉強のかたわら、持前の腕を野球部に投じた。最近益々腕をみがいて県の高校野球界でも屈指の捕手として名を挙げ

く書いて、○君をばげましてくれるように頼んだ。ところが数日後の彼女からの返事は「○さんのことをお知らせ下さいまして、ありがとうございます。しかし、あなたがあたくしにこのようなことを頼んだのはどうしてなのか、あたくしにはどうも見当が付きません」又「前に○さんから野球の県大会のスケジュールが決つたからといって、知らせしてくれたのですが、その時なんかは、S校は優勝候補の一つだなどと言つていながら、二回戦で敗れてしまつた。」「そして「兎に角、○さんに便りを（出したいくないのですが）出してみます。」等というのである。僕はびくつきしてしまつた。人間ってこんなものでよいのだろうか、天野さんがある本に社会性の欠如を指摘していたが、これもその例にもれないと思つた。

たとえ彼女が元の仲良しでなかったにせよ同じクラスで中学時代を送つた人であつてみれば、どこに不思議があるだろうか。又野球のことにしてみたら、これはあくまで勝負の世界であつて、そのときの運にも大きく左右されることは過去の経験でよく知っているのだ、それを予想に反して敗れてしまつたからといって、裏切られたと思つたのだのでは、どうにもしようがない。女の人って皆んなこんなものなのだろうか、経験の狭い僕にはまだよくわからないが……。我々はある年令に達すると、恋愛をし（或いはそうでない人もあろうが）兎に角ある時がくると、結婚してしまふようだ。偉い学者がよくいっているが、結婚前はお互いに相手の理想像を描き、又、希望も沢山あるらしいが、いざ結婚してしまふと、数多くあつた希望が次第に不安と絶望とに変わつてしまふ、という。そしてこうした人々によつて構成される社会が、矛盾と虚偽と絶望に満たされた社会になるのは当然のことである。願わくば、僕は森の中で、小鳥達にかこまれて静かに、一人で

住んでみたい。すべての社会の矛盾と虚偽と絶望とから抜け出して、しかしみんながこうしてしまつたら世界の進歩はないのだし、やはり運命の扉が道をふさいでいる。

ごく最近になって知ったことだが、〇君は最初に僕が心配したほどにはなっていない。激励の手紙を書こう。三月に彼が関西旅行に行ったその帰りに、笑顔で彼に逢つて、お互いにこの社会の矛盾と虚偽と絶望の中に立って、困難を愛情をもって迎え入れ、そしてそれを粉碎し、その中から少量の真理という金をみつけ出し、又人から何んといわれても正しい自分の道を歩める強い人間になることを誓ひ合おう。

Hへの手紙

一年 平野 一子

窓から見える空の色。でも、私には残念ながらこの空の色を形容するだけの言葉を知りません。ただ、本当に「美しい」と言うだけしか。

こうして、ひとりでこの空を仰いでいると、光太郎の智恵子抄の一つが浮んできます。「智恵子は東京に空がないという。本当の空が見たい」という。「阿多羅山の上に毎日出ている青い空が智恵子の本当の空だ」という。あどけない空の話である。」

あどけない——詩人は最後にこう結んでいます。「あどけない」というこの心が、わかるかしら……、あら、又こんな独言を言っている、相変らずの、センチメンタルで、少女趣味だと言って笑われますね、だって、あなたはセンチメンタルであるより、もっとリアルな現実立ち向うことを主張なさつていらつしやいましたから。

の、ふたつ、みつつがほんのちよつと開き始めました。そして弱い冬の陽にも、力強く輝かされております。私は、この梅の木を見る度に、植物界の平静さを本当にうらやましく思います。植物には植物なりの生存競争があるのでしょうが、自然のままに、生命の調和を示して、とんとん伸びて行く様子を私は本当に素晴らしいものだと思います。私は生きて行くことの苦しさや、現実のはげしさからのがれようとするそんなすくい考えはありません。しかし、私達のどこかに、私達の青春の芽ばえを、あたたく、そのままに、宿らせてくれる世界があつてもいいと思うのです。ただ、やたらに負けまいとしてひざまつてばかりいては、典型的な人間像しか出来上らないのではないでしようか。

あなたに少しでも助言していただけたら幸いと思ひまして、私の思いつくままを書きました。

さよなら

占 い

一年 久 純 二

「まず生命線から見てもしんぜようかな。はほお、あなたは短い命の主ですね。ほら、ここから線がぶつんと切れているじゃろ。」と私の手の平を大きな虫眼鏡から覗いてえらそうにいう。

夜の十時頃の新宿は、盛り場だけに色とりどりのネオンが眼をちかちかさせ、派手な照明から流れ照らされる為にくすくすはなっているが、伊勢丹のあの怪物のような真黒な建物の下に、ロッキートの明り一つで、商売している易者の机が二つ三つばつんとあるのは対照

リアルな現実と言えは、現在の状態ではもう「個人」という存在が「社会」という形の中だけでは考えられないのですからね。

しかし、この現実に対して、私とても重苦しい何かを感じないではいられないんです。だって、何を言っても、何をしても、ちつともスミースミに調和の出来ない、とても抵抗のはげしい時代相を感じるんです。わめきたいような、吐きつけたいような気持ちをどうすることも出来ない日が多いんです。いつか、あなたにこのことを話したら「こんなに変化のはげしい時代に生きるんだから仕方ない」とおっしゃいましたわね。私もそう思うんです。ですから、少し位の抵抗なんかには負けず、一生懸命になって生き抜こうと思つております。

でも、私達の考えが無視されたり、自尊心が傷つけられるようなことを言われれば、いかげん反抗心が起きるのは当然だと思います。もつとも、私は常にあなたの言われている通り、自尊心の特別強い女なのかも知れませんが。

よく「女のくせに」とか、「女なのだから」という、大人達の言葉を耳にすることがあります。私にとってこれ程、大人への反抗心をわきたせるものではありません。口先だけは、いかにも進歩的なことを並べたてておきながら、実際は、これが大人達の本心らしいのですからね。美しいものでも、素直に、心から「美しい」と言えなくなつてしまふような時代相を、本当に恐ろしく思います。こんな風にして私の感情は、すり切られてしまふのでしょうか。我を忘れて、泥だらけの中で生きて行かなければ生きられない世の中なのでしょう。そして私達は一体どうしたらいいのでしょうか。

私がいづも学校の帰りにだけ通る道に、梅の木が二本あるんです。近頃、その梅の木にふつくとした可愛いつぼみがつき、そのうち

的である。あの特徴あるひげをはやし、帽子をかぶり、眼鏡を掛け、客が来なくてもよいような素振りをしてゐる。一人の易者は、興味半分運だめしに、手相を覗いてもらつてゐるのである。「ええ短い？ ふん、私は血統的に云つて長いと思つてゐたのだが。でも短い方が苦勞が少いからいいかな」とは云つたものの、やはり淋しい、なんだか「あなたは明日死にますよ」と言われたみたい（少し大げさだが）感じがする。でも悲観したものでもないと思う。まあ六十才位はよいだろうが、それ以上長生きすればする程、息子や息女に迷惑をかけるところとなり不愉快な思いをするのを知つてはいるが、何せ神さまが決めた命だから死にたい時に死ぬわけにはいかぬものだ。実際、家には八十五才になるお婆さんがいるが、自分では死にたいと言つてゐるものなかな自由にならぬものらしい。とは言うものの相手は昔からあまり信用されてゐない易者だが、短い命だとして、今のうちにしたこと、見たいもの、聞きたいものなどいろいろ考へる。ああ、あの大学に早く入り、選挙に出て議員になり、内閣総理大臣になりたいなどともない空想が頭の中からとびだすが、何せこの世の中であるから、実現は十のうち十はだめなのを知つてゐる。長生き、なんてさつきはいやがつてゐたが、さては懲が出たかな。

「あなたの性質はおとなしく、はずかしがり屋だろう。どうじゃな」と自信ありげに言う。全くその通りだから「そうです」と答える。私はどの人からもおとなしいですわねと言われる。まあ、持つて生まれた性質だからしょうがないが、客を接待して長話をする時が、ふだんあまり長話をしないせいか一ばん困る。それに付けてははずかしがり屋なのだからなおさらだ。小さい時から外に出たがらなかった。そして客がきても挨拶をする機会を作れないのは「はずかしい」ということが

頭の中にあるからであらう。その時は大きくなっただらなれるだろうと思っていたが、今たになおらないところを見ると、一生つきまとうものだと思う。はつきり度合は殊に女性に対して大であることは言うまでもない。「恋愛相はりっぱなものですぞ。しかし、結婚相は大したものじゃないですな。」という。その言葉は有難いが現在高校一年である私にとっては早過ぎるものである。もともと後から役に立つであらうが。今は二年に進学するだけの単位が取れるか取れないか心配なのに。その他易者は、どんな事業に成巧するとか、家を建てるのなり、どの方向がよいとかいろいろ仔細に話してくれた。礼を言い料金を払って後を振りむくと、大勢の人が易者の云うことを聞いていたらしく、私の顔を見てニヤニヤしている。私は例のほつきしり屋のくせが出て赤面し、こそこそそこを立ち去ったのはいうまでもない。

巢立ち

三年 大西 明子

仰げば尊し我が師の恩……

月の光に冷く照し出された街道に子供達の歌声が響き愛らしい影法師を作る。この歌を調子はすれの声で無心に歌う子等。あたりの冷々とした空気を震わす。木枯が頬を紅に染める。やがて小学校を終える子供達であらう。小さな子供達の胸に希望が漲っている。やがて巣立ち行く自分の身を何処に置いたらよいのか？ それさえもわからない。胸中何か得体の知れないものがひらめく。春の声を聞き、色とりどりに花々の咲きはこる頃、母校を前にし、来る春を母校を後に遠ざ

かつて行く自分……。すべての快樂に包まれた学生生活。来る日も来る日も或る時は息せききって、又或る時は瞑想にふけて無意識の中に校門をくぐった。冬の日差しは朝のおとずれと共に一人又一人次々と増えて来る生徒にやがて始まる授業の準備を与える。教卓を前に立つ先生。住みなれた教室の使い慣れた机の上には年と共に無数の彫り物が出来て行く。又黒い冷たい鋳物が真赤に燃える頃には一輪の若々しいリングを作る。そして一時も離れたくない。先生らしい足音が教室に近づくと生徒は一斉に散って行く。これにも又多くの思い出がある。雄大な富士の姿を仰ぎ、新鮮な空気に包まれていたかつての自分の姿が思い出される。オランダ風の屋根や、それに続く竹やぶ、そのむこうに遠く雪を頂いた山々の壮観等……。この恵まれた環境に育った私達は真に幸福だった。創立四周年を迎えた本校も着々と完成され、やがては将来の目覚ましい発展をのぞみつ、今私達は住み慣れた母校を去って行くのである。

彷徨

鈴木 琢磨

あの松がはえている所まで登って見ようと思い、雨上りの葉の雫がいかにもたれ落ちそうな葉をはずかに寄せながら、山道をとぼとぼと歩いて行くと、すがすがしい夏の朝みたいなのを感じた。昨日、着いた時はバスや人々の騒音で耳をふさぐくらいなのに、今朝はなんと静かなのだらう。海岸によせている波の音がこまできこえてくるみたいだ。鳥が啼いている。山は平和だ。時折、嵐が来るが、嵐が来て

も山は平和なのだ。そんなことを考えているうちに、松の木の間へ出た。この辺はまわり広く、おまけに丁度腰かける台みたいな木の株があったので、休んでから降りることにした。私は少し休んだので、すぐに元気を回復した。もう少し先まで行ってみることにした。地面が雨上りなので、じつとりと水気を含んで足で押したら水が出そうだった。そんな山道を二十分ほど登ると、急にまわりが開けて、目の前に果てしない海が目の前にせまった。お、なんと美しい気持ちの良い日なのだろう。海の色がまるで油壺の海のように、静かで青いじゅうたんを一面に敷きつめたように、ないでいた。空の色もそれに劣らず美しい。はるか水平線の彼方に小さな雲が二つ、三つ、映えていた。ふと眼下を見ると、小さな船が幾艘かあちこちに散在して走っていた。何んと穏やかなのだらう。都会に生まれて都会にそだった。私にはこのようなことが不思議に思えた。毎日々々を建物と建物の間で暮し、機械に使われているような人々は、一体何を見て、春が来たと思

うのだらう。何を見て秋が来たというのだらう。一度でもこのような景色を見せてやりたい。

そんなもの思いに耽りながら、ぼんやりとあかずに幾時間かを過した。ふと空を見上げると、大きな雲が私の上を、低く駆け足で走っていた。その影が海にうつって、どんよりとした海の色に変わっていった。私には悲しかった。私は一旦家に帰り、又時刻、あの景色を見たさで山を登って、先刻の所に来た、しかしやはりあのような美しい海や空は見られなかった。町の方に目を点すると、松の木の間から小さな灯がぼんやりとつきはじめた。私は再び葉をよけながら山道を降りて行った。その山道にそった小さな農家らしい家からは夕飯の煙を立てていた。私にはそのような情景が珍しくもあり、故郷もな

いの、一種の郷愁みたいなものを感じた。

翌日も又、朝早くそこへ出かけた。けれどやはり昨朝のような、きれいな海でもなければ、空でもなかった。私にはそこにいるのがたまらなくいやになった。私はその日、山を降り汽車に乗った。車窓からの風景を見ても私をちっとも楽しませなかった。横浜をすぎ、有楽町の電燈の消滅するのを見た時、始めて東京が故郷であることが判った。私は嬉しかった。それと同時に、私は安心感で胸が一杯となり、涙が出て来るのをおさえることが出来なかった。

弟のこと

上田 光章

僕の弟は、去年この世を去った。弟を思い出すと、ふと、面白いことを思い出した。その頃の僕の日記から思い出して、書いて見た。

その頃、むやみに弟は、本を読むようになった。しかし、時々、間違ふことがあった。

或る日、弟が何を思ったか、本を持って僕の所にきて、読み出した。時々、僕に「これ何ていう字や」と、聞くので僕は「ち」と、教えた。それから少しして、僕が、用事をすませたので、弟の本を、見てやると、弟は又、聞いた。僕は「つ」と、答えてやった。ところが、だんだん読んで行くと「ち」と、いう字が出てくると、弟は「つ」と読んだ。僕が、その字は「ちだよ」と、教えると、弟は「この字と間違ひやすいんね」と、言いながら、又、読み始めた。読んで行くうちに、沢山の間違ひやすい字が、出てきた。あげると、「ち」と「つ」

「ま」と「き」、「わ」と「ね」、「さ」と「き」、「ま」と「よ」、「う」と「わ」、「も」と「し」、「う」と「ろ」、「ち」と「ろ」、「あ」と「め」、「こ」と「に」、「せ」と「き」、「た」と「な」、「た」と「に」、「し」と「つ」等が出てきた。

僕はもう一つ、或ることに気がついた。それは、昔のことである。その日風邪を引いていたので、いろいろな面白い言葉を、言った。

「まだ」という言葉を「ばだ」と、読んだり「み」を「び」と読んだりした。

僕は、面白いことに気がついてきた。それは、鼻を通して出る音、「まみむめも」、「なにぬねの」、のような言葉は濁点のつく音になるつまり、「ばびぶべば」「だぢづでど」等のような音になるということである。さっそくためして見ると、その通りになった。

間違いやすい字や、面白い関係を持つ音が、言葉の中に、沢山あることがわかった。このことを思いたすと、ふと、あの頃のいじらしい弟を思い出すのだ。

わたしの先生

一年 植村 ユリ

息がつまりそうな風に向って頬を真赤にして、冷たくなった手に、「フー」と息をかけながら雪球を作った。ところかまわず降ってくる雪を払いのけ「びゅうびゅう」と飛んでくる球を「キャツキャツ」云いながら逃げまわっている内に球がガラスに当って「ガシャン」と音がした。割った坊主は素速く逃げて、私達も校長先生の怒鳴る声を後

にしながらいちもくさんに校舎へ走り込んだ。せつかく愉快に遊んでいたのに……。

教室に入る時、皆先生の顔色をうかがいつつ席に就いた。授業の終りのベルが鳴って先生は怒らない、然しこんなことを黒板に書いた。「正しいということは自分のことしか考えられない、人間には出来ない」次郎物語の言葉に出てくる二駒だった。私達は「しーん」として思わず皆と顔を見合わせた。誰れ一人として笑う者はいなかった。先生の口もとからこんな言葉が流れ出た。「皆さんにはこの言葉の意味は解りますか、これからの人間は本当に正しいことの出来る人、真に自分を知って他人の中に自分を生かすことの出来る人でなくてはなりませんね」私達は小さかったのではっきり理解することが出来なかった。然し先生が雪合戦の時のことだけは解った。私達が謝りに行ったから、先生は「悪いことをして悪かったと気がつけばよい。少しでも先生の気持ちが解ただけでも嬉しい」と言った。これは田舎の小学校の頃の思い出である。丁度今頃の出来事だった。早やあれから四五年たった今、先生の面影が浮ぶ音楽の好きな、美しい声の持主だった先生「眠りの精を歌った時もあの先生」だと言って馬鹿にした男子もうつとりと聞きはれていたら！ 目の大きく、鼻は低かったけれどやさしかった！ 「私の先生」と呼びたいような……。あの時云ったことは、あの時間の純真な心と感謝が私の生涯の光であるように——私達は正しい真すぐな道を進んで行きたい。

×

×

×

住所録 (教員・生徒)

教職員

校長 沢野次郎	教諭 成田式雄	外川 秀二	玉置 文子	松下 富美子	弓家田 芳子	菅原 真静	高田 俊文	宗内 昭春	山田 律	永浜 先義	大和 久鈴江	室岡 美和	今井 弘	佐藤 登志	石井 健吉	関田 惟義	前田 長治	中平 英子	森田 弘吉	宗像 弘吉
---------	---------	-------	-------	--------	--------	-------	-------	-------	------	-------	--------	-------	------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------

三年生

一組

大島 信六	岡野 猛	坂本 夏男	梅野 茂	橋本 雄司	柿元 醇	白杵 良一	藤本 純助	三井 善男	森井 善男	松井 淑子	長沢 久敏	林 亮	三浦 春奈	黒沢 龍平	青山 圭吉	青柳 達也	石原 利弘	伊志 嶺薫	伊藤 諭紀雄	砂金 修	奥村 晟二	岡崎 久男	笠原 清
-------	------	-------	------	-------	------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-----	-------	-------	-------	-------	-------	-------	--------	------	-------	-------	------

菅野光根 鷹岡義人 竹内義公 武長成行 田中明 田中滋 田中仁 辻俊一 戸谷寛之 戸島銳一郎 中村豐弘 西川涉 西川修生 橋本宏照 羽田實 平出靖彦 藤田晶 松野亮一 宮田健一 村田晃文 山本善兵衛 森野考之 荒木昭子 石塚千秋 大原幸子

鎌田充復 上村宏志 北田宏司 久保幹男 白銀康彦 鈴木正良 関信義 高井淳元 高井弘 竹内洋二 高柳勇夫 谷原康彦 田村義光 中島和男 中山末次 西出良夫 服部修 古海敏 村山昭敏 三宅淑夫 森田常春 山本雅敬 中山進 吉沼宏郎 綿引節郎

三組

大亦博子 落合雅江 加藤早苗 神宿京子 島田展代 関玲子 竹内文恵 長谷川千佐子 藤村恵子 堀内瑛子 松井三枝子 松倉佳子 松田洋子 松本幸子 吉江正代 井上淳一 石原光雄 市川久雄 上原正次 請地康男 小駒真也 小椋敏夫 香川耕之介 鮎川謙 柏橋克己

二組

渡辺晋 池田ルミ子 井上尚子 岩田輝代 小野英子 恩田和代 岸秀子 市東和子 瀬尾多恵子 田村絢子 野崎曉美 袴田徳子 古川多津子 増子明美 若宮和子 遠藤百合子 安藤英男 榎伸治 小川善一 川上隆夫 菊谷泰夫 絹谷泰司 玖島成一 小林均 佐々木

勝本美佐子
加藤志津代
北島静子
隈元春美
小泉勝子
小竹ヤスコ
小林圭子
小林蓉子
後藤喜代子
坂本満子
品田千恵子
菅野英紀子
鈴木昭子
鈴木晶子
土居純子
椿居淑子
徳広佳子
羽生洋子
細井淳子
萩野美代子
前川紗喜子
松南美紗子
松本松代
丸山紀子
宮原正枝

金子伸太郎
川上福礼
北原進
久保田安明
栗山正也
佐藤洋館
佐藤泰雄
島田侃治
杉村武恒
杉本良三郎
高津龍介
高島茂
茶花松寿
中川静村
長阪敏宏
長島秀雄
中村曉彦
難波純一
福島延吉
益島鷹臣
三村俊弥
宮川浩
村上佳臣
村上光明
諸岡達一

五組

村山紀子
山本保子
山本倫子
会田静枝
会田弘子
泉田久恵子
内田新子
江沢滋生
大江橋恵子
大川敏子
小川敏子
小沢シマ子
尾辻靖子
霞美靖子
加藤ヤス江
亀田禎子
木村惇子
倉本千賀子
河野秋子
小池よし子
小池睦子
小島玲子
小林美代子
後藤真佐子
斎藤すま子
佐々木一子

四組

山岸勇
山本勇
横尾秀男
吉村洋
金子妙子
栗山知子
島民子
鈴木順子
高橋節子
岡崎和子
高野好江
中村順子
前出利子
三井郁子
柳美智子
飯高とき子
飯富幸子
伊藤久美子
宗内久美子
江口節子
円城寺貞子
大塚喜久子
大西明子
大橋澄子
押原福子

松高指定
制服・制帽

プリンス商會
TAILOR

電話 (32) 4 2 5 1

下高井戸駅前

御菓子司

三笠家
有限会社

電話 (32) 2 6 4 9

る・くーる・第四號 (非売品)

昭和30年2月28日 印刷
昭和30年3月1日 発行

編集兼発行者 東京都立松原高等学校
る・くーる・編集委員会
印刷所 東京都北区中十条二ノ二
庵原印刷株式会社

山本 山田 山崎 山口 山口 矢萩 村田 水島 堀切 細川 古川 藤橋 平岩 日南 服部 長谷 野筋 錦織 楠山 長尾 豊永 滝口 高野 杉山 柴崎
文民 房道 雅子 美保子 桂子 政子 邦子 美子 清子 子子 加代子 悦子 弘子 実子 惠美子 春子 まり子 淑子 雅子 喜久子 静子

編集後記

今年の三年生の卒業式が例年よりも早く、「るくーる」第四号の発刊が式に間に合わなかったのが残念であります。

今回は前回と同様に予算額が変らず頁数を増加することが出来ませんでした。その少ない頁を完全に利用して多くの充実した作品を載せました。又投稿されたにも拘らず掲載し得なかった作品もあります。が御諒承願い、今回に限らず次回にもふるって、寄稿されることをお願い致します。

今回は一、三年生の寄稿が多く二年生は非常に少数でありましたがどうかこの学生生徒唯一の文芸雑誌を発刊出来たことを感謝致します。又本誌発行に際し寄稿、作品の選択に御協力下さいました校長先生はじめ諸先生方に感謝致します。編集に際して編集員は皆未経験者ばかりで初めはどこから手をつけて良いのかわからず大変苦労しましたが全員の協力によりどうか責任を果すことが出来ましたことを感謝致します。

最後に今後の発展を願い次回からして戴きたいことを記しておきます。

一、寄稿は必ず原稿用紙に明瞭に誤字のないように書き多致応募して頂くこと。

一、この文芸雑誌を年に前後期計二回或は一回でもよいから頁数を増すため予算を多くしてもらい後期になったら今回の失敗を繰り返さないようにすぐ企画編集してもらいたい。

一、全校生徒の住所録を載せていただくこと等であります。(渡辺)

吉原 多実子
渡辺 良枝
和田 洋子

